地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA

28

2005年
春夏号

特集

夢居心でいきいきと むらはドラマティック・ステージ!!

宝くじ 本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

芝居心でいきいきと むらはドラマティック・ステージ!!

●特集企画に寄せて

その日、村の神社の境内や芝居小屋は伝統の地歌舞伎を観る人々で溢れ、地域のお母さんたちが用意した特製弁当や地酒を楽しみながら開幕を待つ。舞台に顔馴染みの役者が登場すると「ようッ、○○さん」と声がかかり、見得を切ると"おひねり"が次々と舞台に投げ込まれる。演じる人、観る人が一つになって、今年も心がふれあう熱く楽しいひとときを過ごす。

日暮れとともに開幕する伝統芸能は、薪能、薪文楽等と呼ばれ、満天の星の元、薪の火が燃える中で聞く三味線や浄瑠璃、大鼓の音色、闇から登場する役者や人形たちの舞いや芝居に、観客は遠い昔の風や先人たちの息づかいを感じる。

社会のめまぐるしい変化の中で生きている現代人にとって、地域の人々が伝承し続けて来た郷土芸能は、安らぎと和への祈りであり、未来へむけての新しい伝統の創造の場でもある。

劇場では子供たちやお年寄りが週一回または月一回ずつ学んできた演劇講座（学校）の成果を発表する演劇祭が開かれている。舞台の専門家から演劇指導を受け、それを全校生徒が参加して発表会を開催している中学校もある。

地方の町村でも月に一度程度は著名な劇団やアーチスト、落語家などが訪れて公演会が行われる。都市と何ら変わることのない近代的な演劇ホール。公演を待ち望んでいた人々の熱い視線と、爽やかな風や星空。その土地の美味しい食べ物や温泉等も出迎えてくれる地方公演は、演ずる役者たちにも人気があるが、またそんな"特別な時間"を共有したいと都市からわざわざ観劇に出かけてくる観客も増えて来た。

演劇の魅力と価値が見直されている。各地に劇場が出来、地方でも中央の劇団やアーチストの公演に触れる機会が増えるに従い、観客としてだけではなく役者として芝居をし、照明、音響等の設備についても学んでもらおうと、演劇教室や演劇講座、ワークショップ等が積極的に開校されはじめている。

これらを通じて子供たちは、正しい姿勢や発音、自分を表現する、人に伝え人のことも理解する、共同で創造活動に取り組む等、現在の子供たちに欠けているものを学ぶ機会となっている。

「でぽら」28号では、地方で芝居小屋を復興して伝統芸能を伝承したり、新しい演劇活動に取り組んでいる市町村を訪ねた。地芝居の上演や演劇活動、著名な劇団・アーチストの招聘という「文化活動」には、それなりの資金と企画運営する人々のすぐれた能力と労働が求められるが、市町村や地域の住民、芝居を愛する人々がサポートしていた。劇場や芝居小屋は文化活動の拠点として活用され、皆明るくていきいきしている。このような文化的風土が地域おこしにとても大切なものだということを実感する取材でもあった。

理屈や説明はいらない、まずは芝居や演劇を観にいくこと、そして機会があったら自分も演じるグループに関わってみること、"芝居心でいきいきと"暮らす、そんな心のゆとりとユーモア精神、創造性がいま求められているのではないだろうか。

＊28号は昨年（平成16年）秋に取材したため、年月日の表示および合併して誕生した新市町村の名称は現在（17年3月）のものに必ずしも統一されておりません。ご了承ください。

「でぽら」編集部
（財）過疎地域問題調査会

地方と都市を結ぶ
ホットライン・
マガジン

DePOLA（でぽら）

NO.28

●もくじ

「芝居心でいきいきと……むらはドラマティック・ステージ!!」
●特集企画に寄せて――― 2

■芝居小屋を復活して伝統芸能を上演

佐渡・金井能楽堂の薪能

・大衆演劇の常設館として「康楽館」（秋田県小坂町）――― 4
・父から子、孫へ…伝統歌舞伎を伝える「粟井春日歌舞伎」（岡山県作東町）――― 7
・能楽を通しておもてなしと心身の鍛練を「佐渡薪能」（佐渡市金井能楽堂）――― 10
・鎮守の森で昔日のディナーショー「清和高原の薪文楽」（熊本県山都町）――― 12

■演劇活動で地域おこし

・江戸時代から継承してきた地芝居の里伊那谷を湧かす「大鹿歌舞伎」（長野県大鹿村）-18
・北の漁村の元気な青年劇団「浜益小劇場」（北海道浜益村）――― 21
・「無名塾」と夢を育む演劇文化のまち「能登演劇堂」（石川県七尾市旧中島町）――― 24

大鹿歌舞伎を観にきた人々

■東北から演劇文化を発信する

・中学生も高齢者も年に一度は"役者"する「ゆだ文化創造館」「銀河ホール」（岩手県湯田町）――― 28
・"文化"にふれて、学んで、表現する「川西町フレンドリープラザ」（山形県川西町）――― 31

小坂町「康楽館」明治の面影を残す楽屋

●でぽら・エッセイ
村芝居の風　小沢昭一　15

INFORMATION
「東北から演劇文化を発信する」――― 35
・伊達文化を今に伝える「登米能」宮城県登米町
・漁師が継承して来た上方歌舞伎／青森県佐井村「福浦の歌舞伎」
・雪の上で酒食しながら地芝居／山形県「黒森歌舞伎」
・演劇を全国ネットで発信／秋田県田沢湖芸術村「わらび座」

●(財)過疎地域問題調査会からのお知らせ　35　　編集後記／奥付け　35

「でぽら」とは―――

Depopulated Local Authorities（人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体）からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいますが、国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめ、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」（でぽら）を発行しています。

表紙●写真
左上/川西町フレンドリープラザ、置賜農業高校演劇部のミュージカル
左中/栗井春日歌舞伎
左下/能登演劇堂「いのちぼうにふろう物語」の一シーン
右上/佐渡市、金井能楽堂の定例薪能
右中/清和薪文楽。秋祭りに奉納公演
右下/浜益村「浜益小劇場」の演劇

●芝居小屋を復活して伝統芸能を上演①

大衆演劇の常設館として 康楽館

秋田県 小坂町

明治43年創設の和洋折衷型の劇場「康楽館」

明治43年に開設した日本最古の芝居小屋。白亜のお洒落な洋風建物だが、中へ入ると花道やすっぽん(切穴)、直径約10mの回り舞台、昔ながらの桟敷席など典型的な明治期の芝居小屋という和洋折衷づくり。明治、大正、昭和を経て大衆演劇、歌舞伎、オペラ、映画などが上演され、鉱山で働く人々や東北の人々に親しまれてきた。4月から12月まで大衆演劇が常設公演されて観光客など10万人が訪れ、十和田湖観光の一翼を担っている。

●鉱山の町から観光の町へ

小坂(こさかまち)町は江戸時代末期から鉱山の町として栄え、明治・大正時代には鉱産額が日本のトップクラスを誇った。そのため東北の山間部でありながら早くから水力発電、鉄道、道路、水道が整備され、従業員と家族のための娯楽施設として康楽館が明治43年に設置された。

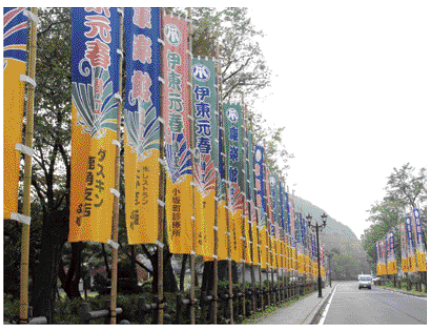
当時のお金で15万円かけたという本格的劇場で、外観は白亜の西洋建築、中は1階は和風の芝居小屋風で桟敷席は舞台にむかってゆるく傾斜、2階席は後ろの席も十分観られるように階段状に作られている。柿落としには尾上松鶴一座の大阪歌舞伎が公演され、「オペラ音楽団」も公演された。以来中央の演劇や大衆芝居が観られる東北有数の劇場として賑わい、大正12年には地元出身の演劇人・福田豊太によるメーテルリンク作「青い鳥」が公演されている。昭和に入ると無声映画やトーキーが上演され、戦後の映画全盛期には東京と同時封切りで映画が上映された。また様々な劇団が訪れ、楽屋の壁には役者たちのサインが沢山残っている。

しかし昭和40年代になると、建物の老朽化やテレビの普及等で観客は減っていく。小坂鉱山は娯楽施設としての役目は終ったとして昭和45年に康楽館を休館した。その背景には鉱山経営が困難になった事情があり、50年代中頃には鉱山も縮小経営し、リストラで若者

▲2階席から1階を望む見学者たち

▲舞台裏手にある楽屋。役者たちのサインや写真が興味深い

▲当時のまま、奈落にある手押し式の回り舞台



や従業員がどんどん町を出ていった。

康楽館を取り壊す話もあったが、町は鉱山の町から観光の町へ転換を図っていこう、その活性化の資源として康楽館と明治時代に建築された小坂鉱山事務所を観光に生かしていくことを決断した。幸い年間３５０万人訪れる十和田湖が小坂町にはある。町は鉱山から康楽館を譲り受け、２億２０００万円かけて修復工事を行い、昭和61年に町営の芝居小屋として甦ったのである。

●甦った芝居小屋

東北自動車道を小坂インターで降り、十和田湖を結ぶ樹海ラインを行くと、間もなく左手に「明治百年通り」が現れた。美しいアカシアの並木道、その脇を華やいだ幟旗が出迎え、康楽館の建物が現れた。明治時代のモダンな白亜の建物で屋根や軒飾りに西洋建築の意匠を凝らしている。切符売り場で券を求めて中に入ると、黒子衣装の男性たちが出迎えてくれ、劇場に案内してくれる。そこは伝統的な芝居小屋の世界。黒光りした柱や手すり、階段には、長い歴史と観劇してきた人々の感動が込められているようだ。

６００人は収容できる古典的な桟敷席だが、洋風な板張り天井と中央に施した八角形の枠組み、四辺に配置されたチューリップ形のライト等、当時としてはかなり贅沢でハイカラな劇場であったことが伺える。

ここで伊東元春一座の大衆演劇が10時、12時、２時の３回公演される。訪ねた時は12時の公演前で、客席では弁当を食べながら観劇しようという客が一階席をほぼ埋めていた。バス等の観光客の観劇＆昼食コースになっていて、康楽館弁当には８４０円から３１５０円（地酒付）まで15種あり、黒子姿の職員たちが忙しそうに膳を客席に届けている。芝居を見ながらの飲食が可能で、間もなく幕が開いて、江戸・隅田川辺りの舞台が現れた。伊東元春と４人の役者が演じる時代劇「編笠由良之介―江戸桜合鏡」で、ゴミの不法投棄という現在にも共通したテーマの人情劇。伊東座長の大立ち回りと若い男女の恋が客席を湧かせる。

続いてアトラクションとして、会場の客を舞台に上げて、チャンバラや時代劇の台詞、仕種等を体験してもらう「あなたが主役」という名の即席芝居。役者の仁科さんが会場から一人の女性を連れて舞台へ上がってくる。座長が軽く芝居を指導したあと、楽屋へ連れていきすばやくメイクと衣装を施して、再び舞台へ。素人も時代劇の役者風に身支度が整うと気分が盛り上がるのか、台詞や立ち回りも何となく様になり、客席は拍手と笑いで盛り上がる。

終了後楽屋で伊東座長は「小坂の人は地芝居を見なれているので掛け合いが上手く、芝居がやりやすいんですが、最近は地芝居を初めて見るという観光客が多いんです。特に若い人は歌舞伎も大衆演劇も知らないので、日本の伝統芸能に少しでも関心を持ち、楽しんでもらいたいと、観客参加型の余興として始めたんです」と語っていた。

舞台で役者に変身した客には記念にポラロイド写真が手渡される。

その後は太鼓、三味線、踊りなどが華やかに演じられ、客席からご祝儀やおひねりなどが寄せられて、約１時間の公演が終了する。しかし掛け合いやご祝儀は、中高年の客が多い12時からの公演ではあったが、２時の公演では若い客層のせいかゼロ。舞台や芝居小屋を熱く盛り上げるのは客たち、でもそんな粋な客が年々少なくなってきているのも現実だ。

康楽館では、４月上旬から12月中旬まで伊東元春一座が常設公演しているが、その間に大歌舞伎大芝居（７月初旬・３日公演）や中央で活躍する役者や演劇グループの公演、地域の子供や青年らの演劇・舞踊発表会に使用されている。

山崎明館長は「常設公演が終ると、館内の見学コースを除いて公演は３月まで休み、２月に映画上映懐を数日間開催します。我々はその間、全国を回って康楽館の宣伝と予約取りをします。十和田湖観光と康楽館をセット

上右／伊東元春一座演じる「編笠由良之介―江戸桜合鏡」
上左／津軽三味線を弾く伊東座長　下／客席の女性が舞台へ上がって剣劇の体験。メイクされ衣装を着ると役者に変身してご機嫌

左／明治38年建設の小坂鉱山事務所。展示室、レストラン、土産コーナーがある
右／康楽館は地域おこしの拠点と語る山崎明館長

したものが人気で、最近は中高生らの修学旅行に観劇を入れるケースが増えました。先日も横浜の女子中学生が２００人見えて２階席もいっぱいになりました。

一方、地域住民や秋田の演劇ファンのために著名人の演劇などを招聘したり、貸館として高校の演劇祭、子供たちの文化活動にも広く開放しています」

昨年はイザベラ・バードを題材にした「矢立峠に虹が立つ」（保坂豊演出）、風間杜夫ひとり芝居三部作（平成15年度芸術祭大賞受賞）等の公演が行われた。

山崎館長は昨年4月に役場から派遣されてきた。それまでは財政担当だったそうで、財政的な立場でみる康楽館の経営については「年間10万人入館すればトントンですが、いまは少し赤字です。でも若い人の雇用やお弁当、土産物など、地域おこしや活性化の大きな目玉になっています」という返事が返って来た。

職員は15名で、山崎館長を除いて三セク、小坂町開発公社の職員。殆どがU・Iターンしてきた人たちで、館のガイド、奈落の仕掛けの操作、照明、弁当手配まで、実にきびきびとよく働く。なかでも伊東元春さんの芝居に合わせて奈落へ行き、回り舞台を手で押したり、スッポンの操作をする作業では、一秒の狂いも許されない。職員の一人は、回り舞台を押しながら「ここで働くようになって、先人が最高の粋を結集して劇場を造り、人々に夢と娯楽を提供して来たことの素晴らしさを身をもって実感しています。これからも多くの人に愛され、芝居に関心が高まればと思います」と言っていた。

●1年間、生活も一緒の芝居家族

伊東座長(66)は康楽館で19年間公演してきた。東京浅草に家があり、奥さん（舞踏家）や子供と離れての単身赴任。12月中旬には東京へ戻って、1月に入ると新たに公演用の役者を募集し、3ヵ月かけて特訓する。

「私は芝居の他に浄瑠璃、長唄、落語など何でもやって来ましたが、ある人の紹介で康楽館を知り、この素晴らしい施設を生かしてこの独自の芸能をやりたいと思いました。各地にいい芝居小屋がありますが殆ど活用し切れていないので、町の要望もあり常設公演をすることになりました。1月から稽古をはじめ、4月から9ヵ月間は小坂町で暮らすことになります。役者は芸能に関心のある若い人を採用しますが、履物の並べ方、食事の仕方等生活の基本を教え、さらに歌舞伎も大衆演劇も知らない世代なので、芝居の形を一から教えることになります。小坂での共同生活は若者にはきついので、そのため一年契約にし、毎年新たに役者を募集しています」と伊東さんは言う。

今年伊東一座で働いた役者は、仁科やよいさん（埼玉県川口市出身・19歳）、高橋大介さん（山形県鶴岡市出身・27歳）、佐々木優人さん（横浜市出身・25歳）、向井亮平さん（北海道出身・24歳）。皆演劇には素人だったが、ここで役者として大きく成長した。

12月中旬の公演終了で小坂町を去ったが、「大自然と温泉と歴史のある小坂での生活は素晴らしかった、生涯の大きなプラスになると思う」「今後も声優などをめざして芸能活動を続けたい」「剣術や日本舞踊、太鼓など大衆演劇の基本を学んだので、さらに勉強したい」と今後の夢を語った。

20年目を節目に、現在の常設公演のあり方を見直してはという声もあり、町では慎重に検討していく方針だ。

（文／浅井登美子　写真／小林恵）

伊東元春座長（下）の元で修業し、剣劇．太鼓．三味線等を熱演してきた若者たち（上）

康楽館　☎0186-29-3732

「白浪五人男」

●芝居小屋を復活して伝統芸能を上演②

父から子、孫へ――伝統歌舞伎を伝える

粟井春日歌舞伎

岡山県 作東町

江戸時代から農村歌舞伎が盛んだった岡山県美作地方。戦後はほとんどの地区から姿を消していったが、作東町粟井地区では明治初期に春日神社に住民の手で舞台を建設、戦後も奉納歌舞伎を続けて来た。現在芝居小屋は移築再建され、保存会と地域の人たちにより年一回上演されている。客席の壁は花代の御礼紙がぎっしり並び、子供たちの演技に声援とおひねりが飛んだ。

●農村歌舞伎が盛んだった地域

台風一過、穏やかな秋日和が戻った日曜日。作東町粟井地区では春日神社の秋祭りが行われ、子供神輿と大人神輿が地区内を練り歩いたあと、春日神社に奉納した。神社は水田地帯が広がる粟井地域東部の丘陵地にあり、神輿は最後の坂道を「がんばれ」とかけ声をかけられながら登って神社に到着した。

春日神社は平安時代（1013年）に創立した歴史のある神社で、その昔には美作地方を統治する城もあったという。地域の氏神様として親しまれ、境内には樹齢千年に近いケヤキやヒノキ、スギなどが茂っている。神社の境内には広場があり、かつてはここに祭神を行う舞台小屋があり、夏と秋に奉納歌舞伎を上演してきた。

岡山県北部の美作地方は、江戸時代から庶民芸能として農村歌舞伎が盛んに演じられたという歴史風土の土地柄。特に作東町は出雲街道の本陣が置かれて宿場町として賑わった。そんな背景もあり旧粟井村では明治初期に、各戸から一人ずつ奉仕活動に出て春日神社に舞台を建設した。回り舞台がある当時としては本格的な舞台で、地下に楽屋と回り舞台を回す機構を持ち、客は野外で座って見ていたという。

戦後はGHQの芝居に対する抑制もあったが、奉納歌舞伎を上演し続けた。舞台は地方巡業にくる大衆演劇場としても活用されたが、40年代になるとテレビの普及等で農村舞台は衰退期を迎える。

各地で舞台が消えていくことに危機感を持った粟井の人々は、伝統ある歌舞伎を継承していこうと、昭和52年に粟井春日歌舞伎保存会を設立、積極的に保存に力を入れてきた。

一方、明治時代に建造した舞台の建物は老築化し危険になってきたため、廃校の木材等を活用して改修しようと模索していたところ、町が建築費を助成してくれることになり、平成4年に隣接する山裾に新しい春日座が建築された。従来よりひと回り大きい町家風の木造建築の芝居小屋で、回り舞台のある広い

作東町粟井地区の美しい田園風景と春日座（下）
◀春日座玄関

春日神社秋の例祭。子供神輿が町内を練り歩いたあと神社に奉納

舞台（間口10・52m、奥行7・88m）、花道、太夫座、楽屋があり、300人収容の客席中央には客が出入りするために板を敷いた中道がある。管理運営は保存会が当たっている。

●保存会を設立して継承する

16年秋の粟井春日歌舞伎公演は10月9、10日の二日間行われたが、台風の影響で我々がお伺いしたのは10日。昨日に次いで舞台準備はほぼ整い、今日の演目に合わせた舞台の点検を有友一正さんらが行っている。作東町地域振興課主幹である有友さんは、春日歌舞伎保存会の若手代表者として舞台にも立つが、裏方や広報活動を担い、子供も三番叟や子供歌舞伎で出演している。

午後4時になると、7時からの開演に向けて出番の小中学生や父兄が到着、化粧や着付けの人たちも楽屋へ集まって来た。客席には座布団を敷いて席取りする人の姿もちらほら。客席の周りには花代御礼を書いたのし紙が壁いっぱい、花道まで貼られている。

この御礼の書を毎年書いている「花座」の春名悟さん(95)も派手目の和服姿で早々と事務所に来て、硯の墨を擦る。和紙に太い筆で一気に書き上げる腕前は見事だ。「もう何十年とやっていますからね」と淡々と語る。

やがて昼食に一時帰宅していた保存会会長の安東正さん(83)もやってきて、皆ににこやかに声をかけてまわる。舞台裏に高まってくる開演前の熱っぽさと緊張感、この独特の雰囲気こそ演劇を志す人々を魅了するのだろう。

安東正さんは保存会が結成されて以来、会長として粟井春日歌舞伎の指導と運営に当たって来た。

「この辺りは明治初期頃から田舎歌舞伎が盛んで、大会などがよく催されましたよ。私の父親、一八も大の歌舞伎好きで、大きい大会で優勝するなどして名前が売れていました。そんなせいで私も幼い頃から親しんできたので、このまま廃れさせてはいけないと保存会を設立しました。親戚も協力してくれ、親から子へ、孫へと確実に引き継いできました。会員は20名ですが、地域の住民皆が準会員として支えてくれています」

戦前戦後も有志の努力により上演を続けて来たが、昭和40年代には観客の減少で公演が出来ない年もあったという。昭和53年に保存会を設立して普及活動に力を入れるようになってからは人気は復活、さらに新しい芝居小屋の建設により、観客は周辺市町村からもやってくる。昨日の初日には300名が来館、立ち見客で客席はあふれた。

「施設は町の助成で再建しましたが、運営は保存会が独立採算で行っています。他の大半の地区が町村の助成金で運営しているけど、ここは観に来てくれた人の花代だけでやっとる、ありがたいことです。基本は、いろいろな人が参加して、同一権利、同じ責任で運営するグループだと思っています」

春日神社の秋祭りに奉納芝居として上演するほかに各地から招聘を受けることも多くなり、昨秋は代表的な芝居小屋である香川県琴平町の「旧金昆羅大芝居」で公演した。

全国芝居小屋会議には平成8年に入会した。きっかけは有友さんの奥さんが九州福岡の出身で、山鹿市の八千代座を見学し、古い芝居小屋を保存して古典芸能や大衆演劇を公演していることに感銘、安東会長らに入会を呼びかけたことにある。

いま内子座、康楽館など14の芝居小屋がメンバーとなり、年1回交流事業を行っている。

今まで粟井春日座が公演して来た演目は

右上／歌舞伎の継承を支えて来た安東正保存会会長　右下／役者として事務局として活動する有友一正さん　左上／御礼の書を描く春名悟さんと見守る安東会長　下／客席いっぱいに張られた花代御礼紙

「絵本太功記十段目・尼崎の段」「生写朝顔話（朝顔日記）」など約20題に達し、他に子供たちが演ずる「三番叟」や「白浪五人男」が人気演目として欠かせない。

●子供たちの演技に熱い声援

陽が落ちて、芝居小屋にライトがつくと、早めの夕食を終えた見物客が次々にやってきた。トップを飾る「三番叟」は昨日は小学6年生、今日は中学生3人が演ずる。楽屋ではあどけない感じの子供たちだったが、化粧をし衣装を身につけると艶やかで華々しい姿に変身。少し緊張しながら舞台の袖で指の動き等を練習している。

「練習は夏休みを終えてから週1回位ずつしてきました。小さい時から観て来たので、自分が出られるのは嬉しい」「去年もやったけれど、動きが早くて面白いので、その分難しいです」と言っていた。

続いて楽屋では中学2年生男子5人が演ずる「白浪五人男」の着付けが行われている。二人の顔師と衣装の女性二人は、会が依頼した半プロの人たち。会社員、運転手などの仕事を持ちながら、専門家や現場で長年間学び、自前で材料を揃えている。

「各地の秋祭りに呼ばれて出かけ、素人さんを見事な役者に仕立てるのが楽しみです」と顔師の高村さんは言う。

高村さんらのメイクで歌舞伎役者の顔に変身した少年は、続いて美しい染め着物を着て、一本差し、下駄履き姿になる。観まごうばかりのいい男、さぞ会場を湧かすことだろう。

三味線と義太夫は近くの町に住む青年2人が担当する。二人とも趣味で三味線や小唄等をやり、この日に向けて練習をくり返して来たというだけあって、張りのある音色と声がドラマを盛り上げ、役者との息もぴったり合っていた。

午後7時、客席はいっぱいになり、幕が開いた。地元の女性たちが演ずる太夫、三味線、囃方に合わせて少女たちが舞いだすと、客席から「○○ちゃん、いいよオ」「すてきだよオ」と声がかかり、壇上におひねりが投げられる。「白浪五人男」で、少年たちが着物を着流して傘をさして花道に登場すると、会場のかけ声と歓声、おひねりはピークに達した。少年たちの台詞には未熟さがあるが、それも愛嬌。人々が地域の子供たちを心から愛し、この地で大きく育っていって欲しいという思いが会場全体から伝わってくる。

15分間の休憩を終えて本日の目玉、大人たちが演ずる「太功記十段目」の登場。光秀役を演じる横林秀樹さんも若手のホープで堂々とした演技力が光る。二人の子供たちも「三番叟」や「白浪～」に出ており、家族皆で支えていることがわかった。

初日の9日は、台風通過も何のその、会場は立ち見の人であふれ、安東会長が出演する「ひらかな盛衰記二段目・先陣問答の場」、安東さんの息子、寿夫さんや有友さんらベテラン9人が演じる「寿曽我対面」などの定番歌舞伎に観客は酔いしれたという。

（文／浅井登美子　写真／小林恵）

▲開館1時間前、楽屋では化粧と着付けで大忙し

▲「三番叟」を演じる子供たち▼大人たちの円熟した演技が見事「太功記十段目」

▼花道に登場した「白浪五人男」の中学生たちに歓声が湧く

作東町役場地域振興課
☎0868-75-1111

●芝居小屋を復活して伝統芸能を上演③

能楽を通しておもてなしと心身の鍛練を

佐渡薪能

新潟県佐渡市
金井能楽堂

佐渡の人々は畑仕事をしながら謡曲を口ずさんできたというほど能楽とのかかわりが深い。現在は「鬼太鼓と能楽の島」として佐渡観光の目玉になっており、常時薪能が鑑賞できる「佐渡能楽の里」(両津をはじめ、島内には33棟の能楽舞台がある。能楽は観光客へのおもてなしであると共に、住民にとっては佐渡の風土や芸能に思いをはせながら、体をしゃきっと伸ばして声を張り上げることで心身を鍛える意味もあるようだ。若葉薫る6月、世阿弥とゆかりのある金井能楽堂で「観光定例能」が公演された。

●佐渡一、自慢の能舞台

佐渡の能楽は、その昔、京から佐渡に流刑となった世阿弥によってもたらされたと共に、初代奉行大久保石見（守）長安が能楽師出身だったことから島民に普及、佐渡観世流として本間家や弟子、地域の人々に伝承されてきた。世阿弥は金井の泉地区にある正法寺に居住していたといわれ、同寺には世阿弥が使っていたといわれる能面が残っている。そんなことから能、鬼太鼓、文楽人形などが暮しの中に根付いており、伝統芸能の拠点として金井能楽堂が建設された。

外観はコミュニティセンターと呼ばれる建物だが、一歩入ると桧の心地よい香りにあふれ、磨かれた板の間の客席と、その前に能舞台が現れた。白木の総桧造りの板敷きで、舞台となる正方形の平面と、後座、地謡座、橋掛という長い廊下、その先に鏡の間、楽屋へと続く本格的な能楽堂である。

「ここには代々医者をする堀家があったんですが、土地と資金の一部を町に寄贈してくれたんです。総工費2億円をかけた佐渡市内でも最高級の自慢の施設です」と語るのは金井能楽研鑽会会長の渡辺威人さん（71）。

「能の指導者や愛好者グループもいろいろあって各々活動していたんですが、会員の高齢化と少人数では発表の機会が取りにくい等の

「巴」を演じる岩崎紘美さん

▼演能の一場面（東北随一を誇る能舞台）

金井能楽研鑽会会長の渡辺威人さん。ロビーの一角では能面や衣裳を展示している

課題もあったため、何年か前に研鑽会を発足し、一つになって発表会や普及活動を行っていくことにしたんです」

渡辺さんは元教師。佐渡の歴史や芸能には詳しいが、能や謡曲を自分で演じることはなかった。50代半ば頃、自らも趣味ではじめてみようと能楽のグループに入会した。郷土芸能に対する知識と運営能力が買われて2年前には会長職を引き受けている。

金井能楽研鑽会のメンバーは40名。平均年齢は62、63歳とやや高齢化しているが、若い女性や主婦も少しづつ育っている。第5回を迎える「観光定例能」では、仕舞にベテランに混じって若手や中堅の女性たちが舞を披露、ベテランが「地」といわれる謡方を担った。

謡曲や能楽を指導している一人が児玉ナツエさん（75）。

「娘の頃から何人かの師匠に師事してきて50年以上になります。それを若い人などに教えるうちに門下生も沢山育ちました。能は正しい姿勢で舞い、謡曲を謳い、大鼓や笛などの演奏もする総合的な芸能ですから、修得には時間がかかり、これでよいということはありません。週一回練習を行っていますが、心を清め身体を鍛練することから、老化防止にも役立つと喜ばれています」と語る。

母親から修業した娘の博子さんが中堅奏者として、今回の舞台でも活躍している。

●女人の哀感を舞う「薪能」

研鑽会の発表会のあとは、休憩をはさんで能「巴（ともえ）」が演じられた。膨大な演目がある中で、唯一の女武者もので、シテを岩崎紘美さん、ワキを児玉弘さん、ワキツレを柳屋清二さん、狂言を近藤幸子さんが演じた。

物語は、近江粟津の原で旅僧が一人の女と出会う。女は義仲の霊を慰めて欲しいと僧に頼むと、夕暮れの草陰に消えていく。女は木曽義仲の愛妾で、義仲はこの原の戦いで重傷を追った。その時女は「どうぞご自害を。私もお供をします」と言って襲ってくる敵軍を相手に闘う。戻ると義仲はすでに自ら自害し果てていた。僧の前に巴は武装して 再び現れる――。

一見穏やかな能面だが、女の哀感や口惜しさが伝わってくる。それが仮面劇能楽の魅力で、動きも舞いも大変シンプルであるのに、大鼓、小鼓、笛などの囃子がつくとドラマ性を盛り上げる。ストーリーは歴史上の人物が亡霊等になって出現するものが多く、面は彼等の命が乗り移ったかのように表情を変える。舞台から伝わってくる幻想的で妖しい時代絵巻は、私たちが現在味わうことの出来ない精神世界を提供してくれる。

しかし、これらの能楽を公演するためには、専門のプロの能楽師と謡方を招聘し、装束も着付けも専門家に委託する場合が多い。しかし、一部を除いて観賞料は無料になっている。

金井能楽堂では「黒木御所例大祭」（7月）、「世阿弥供養祭」（8月）が有名だが、「公演や能発表会には会場使用料を含めてかなりの出費が必要です。佐渡観光協会や市にいかに助成してもらうかも私等の大切な仕事です」と渡辺さんは語っていた。

（文／浅井登美子　写真／小林恵）

鈴木義枝さん（左）、石川ミサさん

右／加藤紀美子さん

仕舞いの謡曲を演じる女性たち。右／伸川律子さん

▲太鼓（安達忠雄）、小鼓（大友サチ子）、笛（水口みどり）の囃子が場面を盛り上げる

▶ 金井能楽堂の玄関

金井能楽研鑽会（町公民館）☎0259-63-4151
佐渡観光協会　☎0259-23-5000

●芝居小屋を復活して伝統芸能を上演④

鎮守の森で昔日のディナーショー

清和高原の薪文楽

熊本県 山都町

農民たちに150年前から継承されてきた浄瑠璃人形芝居「清和文楽」。日本古来の伝統技術を駆使した文楽館が建築されてからは、月2回保存会の人々が定期公演をしている。秋祭りに奉納公演する「薪文楽」が開催され、鎮守の森は九州各地からやってくる観客で賑わった。

●心づくしの郷土料理を味わって

鋭い刃物のような三日月が、かろうじて明るさの残る日没前の空に残っている。地上は、すでに闇だ。樹齢四〇〇年と言われる杉木立の中。熊本県山都町（やまとちょう）清和高原の大川阿蘇神社境内に薪文楽（主催・清和村文楽の里協会）の舞台が浮かび上がった。山都町は、今年（平成17年）2月に矢部町、蘇陽町、清和村が合併して誕生したばかり。人口2万人ほどの町だ。

昨年10月16日の昼過ぎ。役場職員の木野貴之さん(28)と村上寛さん(25)の二人が、神社の鳥居に青竹の手作り照明を括りつけ、雰囲気のある会場にしようしていた。役場職員も総出で、薪文楽を盛り上げようと協力しているのである。

清和文楽は、旧清和村（せいわそん）の郷土古典芸能として、およそ150年前から地元農民に受け継がれてきた。浄瑠璃を組み合わせた人形芝居である。農民文楽として広く知られる以前から、春の祈願、秋の願成就として氏神様に芝

▲開演直後、空にはまだ明るさが残り、やがて闇の中に舞台が浮かび上がる。演目は「寿式二人三番叟」

伝統の芝居弁当

演目をすべて終了し、御礼の挨拶をする保存会の人たち

開演前のディナータイム。手作りの郷土料理とカッポ酒をいただきながら開演を待つ。今年は地元の中学3年生が招待された

居を奉納してきた伝統がある。今夜の薪文楽でも、神社境内に常設してある芝居小屋をそのまま使うのだ。

「ごちそうを近所同士で分け合ってですね。楽しいんですよ。農家には休みはありませんから。仕事を休むのには理由が要るんです。それで、神様の名を借りて休む。それが春と秋の奉納上演だった訳です」

たまたま芝居小屋の様子を見に来た兼瀬哲治旧清和村村長(58)である。

現在、清和高原薪文楽のキャッチコピーとなっている「鎮守の森で昔日のディナーショー」は、兼瀬旧村長の発案だそうだ。

人形を操るのは清和文楽人形芝居保存会の16人。本業は農業であるが、平成4年に清和文楽館が開館してからは、毎月、第二と第四日曜日の午後、定期で公演をしている。

いってみれば、年一回の秋祭りに奉納公演として演じられる薪文楽は、定期公演とは異なった趣を持つ晴れ舞台なのだ。

太い青竹を組んで境内に設えられた桟敷席では、「昔日のディナーショー」を楽しむ九州各地からやってきた観客で賑わっていた。伝統の芝居弁当が振る舞われている。

心づくしの郷土料理、まずは煮染め。干しタケノコのキンピラ、伊達巻き、ヤマメの唐揚げ、酢の物、チョロギの梅酢漬け。その他に、ゴマおにぎり、巻きずし、おはぎ、ガンモ、栗の渋皮煮、梨。それにかっぱ酒だ。

10人分の料理が詰まっている漆塗りの組み重箱は、清和地区の各家庭に代々伝わっていたもの。古いのは百年前の重箱もある。

兼瀬哲治旧清和村村長

かっぱ酒でほろ酔い、お腹も満たされたところで、カーンと拍子木の音。

最初の演目は、縁起物「寿式二人三番叟」。太夫の勢いある浄瑠璃と三味線の音色で華やかに幕が開いた。

続いて「日高川入相花王」。船頭に冷たくあしらわれた清姫が、恋人と道成寺へ向かった安珍への嫉妬に狂い、恨みながら大蛇になって自力で川を渡っていく、清姫の哀しい恋物語。太夫が絞り出す切ない浄瑠璃の語りが、観客の胸を締め付ける。桟敷を取り巻くかがり火のパチパチと弾けて燃える音が聞こえる。

休憩時間の前には、浄瑠璃ミニ教室とふれあいタイムがある。兼瀬村長(当時)自らが、解説を買って出て、文楽の歴史や人形のからくりを説明してくれる。「嫉妬に狂った清姫が、一瞬にして形相を変えるのは、鯨のヒゲを使ったバネで操作する」と、実演を交えて説明すると、会場に驚きの声が上がった。ふれあいタイムでは、さき程まで舞台に登場していた人形と一緒に記念写真に収まることもできて、一層の親しみが増すようだ。

伝統芸能として鑑賞するだけでなく、演者と観客の距離を縮めようとする努力が、農民文楽の魅力でもある。

休憩の後は、最後の演目「傾城阿波の鳴門」全段。一時間近くかかる大作だ。

阿波徳島のお家騒動によって汚名を着せられ、国を出た十郎兵衛とお弓の夫妻。木戸口に訪ねてきた可憐な少女の巡礼が、国に残してきた我が子のお鶴と知るが、自らは追われる身。名乗らぬが子のためと心を鬼にして追い返す。

切なく哀しい親子の別れ情話に、観客は固唾を飲んで舞台に見入っている。野外の桟敷席はかなり冷え込んできた。

▶舞台で開演前の打ち合せをする人形師、太夫の人たち

▶楽屋で人形の動きや舞台装置をチェック

▶楽屋にて出番を待つ人形

▶公演前に音合わせをする太夫たち

▲役場職員が用意した竹の照明にろうそくを入れて最後の準備。▶闇の中でファンタジックに輝く竹の照明

上／清和文楽人形保存会会長・倉岡輝司さん
下／山下マル子さん（72）、舞台下駄の履き具合を確かめる

心を鬼にして我が子を追い出した後、お弓を襲う切なさと哀しさ、追いかけて連れ戻したい気持ちとの葛藤が、手の仕草、肩の線、体の僅かな動きで見事に演じられる。頭と右手を操る主遣い、左手を操る左遣い、足を操る足遣いの3人が、お弓そのものになりきっているのだ。

●公演日に合わせて農作業

終演の後、御礼の口上を述べた山下マル子さん(72)は、開演前から舞台下駄を履き、舞台に立った時の高さを念入りにチェックしていた。「今日は、特に膝と肩が痛かっですたい。人形握れば、何も痛いとこは分からんですとばい」。

清和文楽人形芝居保存会会長倉岡輝司さん(57)は、モミ種子専用農家である。

「今年で清和文楽館ができて13年目。当時は定期公演を月2回、年50回位と思っていました。ところが、初年度に年176回もの公演。どんなにして農作業をするか、とまどいましたね。今では、計画性が出てきて、公演日に合わせて農作業を組みます」

江戸末期、阿波・淡路系の旅回り人形浄瑠璃一座から農家の人びとに伝えられたのが、清和文楽の起こりである。一時期衰退したこともあったが、昭和に入り復興。昭和29年には保存会が結成された。

「うちの祖父今朝男の時代に、株式で資金を集めて人形を買いました」と、倉岡会長。

12回目を迎えた薪文楽に、仲間を募って福岡から来ていた山下勝子さん(60)は、「今年で4回目、毎年、楽しみにしています。太夫に迫力があって、有名な演目だから分かりやすい。一回来たらやみつきになります。来年は、泊まり込みで来る予定。20席予約して帰ります」。

熊本市内から来ていた稲葉リリ子さん(54)も4回目だ。

「7人で一緒に来ました。お料理がいい。雰囲気がいい。文楽がいい。感激したいので、又、来年も友だち募って」

初めて招待された地元清和中学校の3年生40人を含めて183人の観客は、昔日のディナーと文楽を堪能したようだ。

かがり火が消え、人気のなくなった境内から夜空を見上げると、層になって重なり合う無数の星が、スギ木立の上に広がっていた。

●後継者の育成が課題

薪文楽公演の翌日も、清和文楽館では定期公演が行われた。20人ほどの団体客と4組の家族連れを前に、「壺坂霊験記」を演じる。昨夜の疲れも感じさせない熱演だ。客席の上は、テコの原理を応用した騎馬戦組み手工法で造られ、隣の展示棟は円形木造建築で天井はバット工法。どちらも伝統建築技術の粋を集めている。

太夫と三味線を交替で努める倉岡寿典さん(30)と佐藤義和さん(27)は、清和文楽の源流ともいえる淡路島の人間国宝のもとで2年間、文楽の修行を受けてきた。現在は、清和文楽館の職員として働き、文楽を継承していく要となっている。しかし、倉岡会長は、後継者問題が最大の課題だと言う。

「人形遣いは、ポンと来てポンとできるものではないから」

年間260回にもなる公演回数をこなすには、農家の働き盛りでは両立が難しい。稽古もままならない。農村芸能が背負ったジレンマである。

12年間を経て「清和文楽館」は、旧清和村観光の拠点となっている。地元に受け継がれてきた芸能を自分たちの宝であると認識し、育て、磨き上げることで、村の観光を支える芸能としたのだ。保存会会員の高齢化など、困難は待ち受けているだろうが、今年初めて薪文楽に招待された地元中学生の舞台を見つめる目の輝きが、それを乗り越えてくれることを予感させた。

（文・写真／芥川仁）

▲常設文楽館での公演
▶常設文楽館の公演が終ると、大道具のからくりや人形にふれる「ふれあいタイム」(右)

清和文楽館　☎0967-82-3001

▶清和村文楽館。円形屋根の建物は資料展示館

村芝居の風

小沢昭一

もう遊びたい

二、三年前からは歌をうたってまわっております。今は歌がうたいたい。これからはもう歌で遊ぼうかな、という。ひとくちでいえば、古い歌ばっかり。レパートリーは数十曲。新しい歌は知らないんです。

子どもの時から歌は好きでした。童謡、唱歌、そして昔の流行歌は、子どもの頃に身体にしみついたもの。歌えばスッと少年に帰れるんですね。

正直、公演の旅は大変で、年中やるわけにはいかない。春から秋にかけては、身体を養って、秋に一発勝負。九州は来年、今年は北海道です。

寄席に出ないか・というお話にも心を動かされます。寄席はお金にならない、だからこそ貴重なんです。遊びと修行の場、だからいいんです。

でもこれからはもう遊ぼうかな、と思っても、人生のエンディングメロディが聞こえてくる。それは、はっきりわかります。「いえいえお若いですから」「これからですよ」と皆さんおっしゃいますが、逆に開き直って「これからなんか誰がやるものか」と申したりしています。早くラクになって大往生したいと思うだけです。

艶っぽいことにももうなんの関心もない。ミニスカートはいたお嬢さんがきても「なんだコノヤロ、寒いのに」と思ってしまう。なんの反応もないですね。完全にアガッテます。

食べ物だって若い時はグルメぶってましたが、今は何食べてもおいしい。行き当たりばったりで、わざわざ店を探したり山本益博さんの本を読んだりとかはしません。

ひとりで食べる方がいいですね。だって一生懸命食べられるじゃないですか。私は育ちが悪いから、食べるときも一生懸命なんです。

若い時は長生きしたいな、なんて思ったけれど、長生きすればするほど友だちがいなくなる。このことは計算に入ってなかった。渥美清さんもフランキー堺さんも、どんどん友だちがいなくなる、だから寂しいですね。

今や、あちこち訪ねた場所や人の思い出も残っていません。次から次へと行きましたから、記憶はほとんど絶滅していますよ(笑)

情報量が多すぎるんですね。そうは毎日、発見と感動で暮らすというわけにはいかない。まあ、生きていてまだ仕事がやれるというだけでありがたいですよ。毎日、ありがたいありがたいと言いながら暮らしています。

だってみんな仲間がいなくなっちゃっても、仕事がなんやかんや毎日やれて、夜、お風呂に入って、からだ伸ばしたときに出てくる言葉は「ありがてえなあ」……そんなことです。

その場しのぎで生きてる男ですから、先のことはわかりません。ご注文があればやりますが、ご注文がなければ自分からやる、と言いだすことはありません。

舞台もどんなところだって、出たとこ勝負です。出てみてやあ広いなあと思ったり、狭いなあと思いながらやるわけです。

次から次へとまわっていくでしょ、早い話、疲れるんです。だから早く宿に帰って、次の日のために寝る。次の舞台を元気で充実してやるために、まずは休む。そういうことです。

もちろん、楽じゃない。楽だなんていったら嘘になります。

仲間はああいう役をやりたいとか夢があるようですが、自分はそういうタイプの男じゃありません。夢なんかありませんが、嫌いなものはありますし、お話を頂戴してもお断り

イラスト／松田けんじ

することはあります。逃げる、のが大好きですから。

オレは昭和に生まれたんだ

江戸文化のこともよく聞かれますが、「冗談じゃねえ、俺は昭和に生まれたんだ」って答えます。自分の実体験というか、見たり聞いたり試したりがないことはよくわかりません。

でも自分のこと、とりわけ戦争が終わる前後までのことは、からだにしみついて残ってます。戦後は、その日その日の仕事を、その場しのぎの連続で過ごしてきたので、もうみんな忘れてんです。「おかげさまで」と付け加えますけど。

というのは、まあよく働きました、学生の頃から。働かなくちゃならなかったんです。大学には週にいっぺんしか出ないから、週刊誌と呼ばれてましたね。みんなに代返かなんか頼んで、ノートを借りて。あの頃の学校はそれでもなんとかしのげたんですね。

村芝居の風

そもそも地方という言葉はあまり好きじゃないんです。東京も、また地方だから。

でも、芝居であっちこっちまわっていきますと、待っていてくれる感じがする。東京だと昨日はあれ観た、今日はこれ観た、という感じで、いろいろなものがありすぎる。でも町から村をまわっていくと、「やっと小沢来たか」「今年もまた来たか」……、そういう風が客席からあったかくふうっと吹いてくるのです。誰もそんなことをおっしゃるわけではないけれど、これはウレシイ。

だけどこれは僕だから、ということではなくて、昔からある、いわば「村芝居の風」ですね。

次から次へと遍歴してきて、娘っこだまして次の村へ行く、なんてことが言われます。あの頃からやっぱりお芝居、芸能が来るっていうことは、待たれる、そういうものが前提にあったんですね。

だから大道芸人も、神の訪れなんて言われたわけです。見知らぬ人が訪れて、日常の世界とまるで違う空間をそこにふってわいたように残し、いずこともなく去っていく。そういうのが、昔からの日本を渡り歩いた芸人の基本じゃないですかね。

昔の大道芸は、ものもらいと同じように思われて、神の代理人がきた、と敬われる一方、定住せずに遍歴を続ける人をさげすむ風潮が昔はあったわけでしょ。だから半々なんです。そのあたりが微妙にまざりあって、期待する、おもしろがる、というところにつながっていくようですね。

門付けと茶の間付け

昔の大道芸は門付(かどづ)けといって、一軒一軒、門を付けて廻ったのですが、テレビを茶の間付けって私は呼んでるんです。門どころか茶の間へどんどん入ってくる芸能。メディアの発達で派生してくるいいこと、悪いことありますが、私は、本質的には舞台だろうがテレビだろうが、大道だろうが、やることは変らない。

門付け芸でも、伝統の深い桑名太神楽なんかは、毎年来る日も決まっていますから、迎える家が留守にしなきゃならない時は、渡すものを置いておく。今日は来てくれる日だとわかっていて、お金だったりお米だったりを玄関脇にちょいと置いてある、いいですよね。

舞台によっては、おひねりがとんでくることもあります。放るほうも遊びですから、本当に私に何万円もくれる人はおりません。

芝居も、まあ一方的ではあるんですが、テレビは演じる人と見る人が一体化するということは全くありません。双方向なんて言ってますがね。

獅子舞物売りお断り、っていうような看板を出すのと同じように、いやならチャンネルを変えればいい。細木数子がいやなら消せばいいだけの話です。テレビは身体にも頭にも悪いですけど、私はけっこう見てますよ。細木数子さんなんか出てくると、はじめから終わりまで見てます。

少年が待っていたもの

生まれは杉並ですが、高円寺、日暮里と移って蒲田に入った頃から物心がついたという感じです。僕のふるさとは蒲田ですね。松竹蒲田撮影所が近くでした。親父が写真館をやっていたので、松竹映画の俳優さん、女優さんがよく遊びに来てくれました。

蒲田の家は戦災で丸焼けになりましたから、今はなんの面影もありません。昔のものは全部なくなりましたから。行っても懐かしいという風景はありません。

近所の川にはしょっちゅう行って、ヤンマとっていました。夕方になると水面に虫があがります。それを狙ってヤンマの大群が入ってくるんです。ああもう、その頃のことは細大漏らさず、覚えております。

蒲田にも芝居だけやる小屋がありました。戦争の終わり頃ですけれども、大東亜館というのがありました。軽演劇ですね。歌舞伎とか新派というのではない。ライト級といいますか。曲げ物もやるし、新派もやるし、三本立てくらいで、間に歌謡ショーみたいなのが入る。そういうのを、十日替わりくらいでやってました。それから御園会館。この寄席で漫才や落語、浪花節など、いろいろな演芸に親しんで、それこそはどれほど多くの文化がからだにしみついたことか。

私が子どもの頃はそういうのをやる軽演劇の劇団がたくさんあって、のちにコメディアンで名をあげる方たちもそういうところをくぐってきていた。日本中にそういう芝居小屋があって役者さんが育ちました。

お芝居はそもそも地べたからです。お能でも歌舞伎でも、みんな地べたからです。「芝」「居」というくらいですね。これは日本だけじゃないようですね。それが、地べたから掛け小屋みたいなところに入って、のちに立派な劇場、器ができたということです。

私の地べたの記憶はまた路地の紙芝居。これも毎日来るのを待っていましたなあ。

インタビュー／斉藤四葉

しゃぼん玉座公演「唐来参和」（作／井上ひさし、演出／長与孝子）。反対癖のある戯作者と恋女房の奇遇な運命を、一人芝居で演じた話題作。

「唄って語って　僕のハーモニカ昭和史」（2003．10月しゃぼん玉座公演　撮影／鶴田照夫）

小沢昭一（おざわしょういち）氏
1929年東京都生まれ。麻布中学を経て、52年早稲田大学文学部仏文科卒業。早大在学中に俳優座養成所に入る。51年「椎茸と雄弁」が初舞台。54年には「勲章」で映画デビュー、以来川島雄三監督「幕末太陽伝」、今村昌平監督「豚と軍艦」「人類学入門」「楢山節考」等に出演する一方、新劇やテレビ、ラジオで活躍。60年には俳優小劇場を結成、民俗芸能の研究にも取り組み、レコード「日本の放浪芸」シリーズを制作、著作活動も活発に。82年にはしゃぼん玉座を主宰、井上ひさし作品では「国語事件殺人辞典」「吾輩は漱石である」「芭蕉通夜舟」「唐来参和」等に出演。著書に「放浪芸雑録」「ものがたり芸能と社会」「小沢昭一的こころ」（著書＆CD６枚組）「散りぎわの花」「裏みちの花」「句集変哲」等多数。

江戸時代から継承してきた地芝居の里

伊那谷を湧かす大鹿歌舞伎

長野県 大鹿村

秋の大鹿歌舞伎が公演される塩河地区。左手鎮守の森が市場神社

南アルプス山あいの村で230余年にわたって演じられて来た大鹿歌舞伎。かつては村内13カ所に芝居専用の舞台があり、村人の多くが三味線や浄瑠璃を奏し歌舞伎芝居を演じたという。今も7つの舞台が残り、現在は新緑の5月と紅葉の10月に定期公演するほか、国立劇場などへの出張公演も。全国で2地区だけに認められた国選定無形民俗文化財で、地芝居のリーダー的存在として注目されている。

化粧も着付もこなす役者たち

大鹿歌舞伎秋の定期公演は絶快晴の日曜日、塩河地区の市場神社で開催された。高遠町～遠山郷を経て静岡県へ至る秋葉街道（塩の道）の中程にある分杭峠を越えると大鹿村。鹿塩川沿いの美しい紅葉をみながら峠を下ると、幟旗が立つ大鹿村塩河地区へ出た。

近くには古くから伊那谷の名湯として親しまれている鹿塩温泉があり、村の中心部でもある。

大鹿歌舞伎の公演は正午からだが、9時頃には物産センター「塩の里」広場には見学者のクルマが次々に到着。市場神社の参道では村役場の職員をはじめ歌舞伎保存会の人々がお揃いのはっぴ姿で出迎え、芝居小屋の手前では弁当や地区の特産品を売るお母さんたちが準備に忙しい。300人は座れるという舞台前の広場にはびっしり筵が敷かれ、早くも観客が重箱などを並べている。

市場神社の芝居小屋は嘉永4年（1851）に集落の人々によって建造されたという古い佇まいだが、回り舞台、太夫座、奈落を備えた間口6間、奥行き4間の本格的な舞台。これらは村人たちが衣食住費を削って建造したという。江戸時代に江戸を遠く離れた山里に地芝居をする小屋が13もあり、集落ごとに競って歌舞伎を演じていた。そして時代は明治、大正、昭和、大戦と目まぐるしく変わりながらも、230余年にわたる今日まで継承し続けてきたことに改めて驚嘆する。

岩本純一収入役のご案内で、準備中の楽屋を訪ねた。黒光りする階段を登ると、2階は広い楽屋になっていて、すでに出演者の皆さんが化粧等に取りかかっている。

「義経腰越状・泉三郎館の段」で主役の五斗兵衛を演じる塩沢邦生さんと、「奥州安達原・袖萩祭文の段」で義家役に扮する木下光司さん等が向き合って化粧をしている。顔師という化粧係が別にいるのが一般的だが、長い歴史と実績を持つ大鹿では大抵の役者が顔料も個人ごとに揃え、自分で慣れた手付きで化粧し、着付けも自分で行う。講師を招いて勉強会を開いたり、化粧品メーカーの指導を受けたプロフェッショナルが15人ほどいるという。

塩沢さんは「くにちゃ」と親しまれている郵

▲化粧準備に取りかかる塩沢邦生さんと木下光司さん

▲役者は皆自分で化粧する

▲婦人に手伝ってもらい着付け、塩沢邦生さん

歌舞伎上演翌日の市場神社はひっそりと静寂。歌舞伎舞台は神社の左にある

便配達屋さん。「義経腰越状」ではいつも酔っ払ってばかりいて女房や娘に三くだり半を言われる武士を演じる。木下さんは農業をする75歳。数々の役を演じて来たベテランで「まだまだ現役、鞭打って頑張ります」と淡々と語る。隣の席では、子役の小島由ちゃん（小学2年）が準備中で、髪を結い化粧を施しているのは母親の智秀子さん。智秀子さんは美容師をしているその道のプロで、由ちゃんは一足早く愛らしい「お君」役に変身した。

「去年から出るようになり今年で2年目です」と言い、由ちゃんは母親と台詞の最終稽古。

「義経～」で太夫弾語りをするのは役場教育委員会勤務の北村尚幸さん。大鹿歌舞伎保存会常任理事で、太夫の一人者として知られる竹本登太夫（片桐登さん）に師事して、三味線や浄瑠璃を学び、今回この大役を担うことになった。

北村さんは役場職員として楽屋や舞台回りの進行・雑用もこなしながら、時間を見ながら紋付袴姿に着替え、その間私たちに大鹿歌舞伎がなぜ国選定無形民俗文化財に指定されているかを熱く語ってくれた。

「秋葉街道等を通じて早くから都の文化が入り明和4年（1767）には大鹿で地芝居が上演されたと記述されています。山村の暮しに溶け込みながら、時代の変化にも影響されず受け継がれて来た。現在全国に130以上の歌舞伎保存団体があり、県指定無形民俗文化財になっているものもありますが、国選定は大鹿歌舞伎と山形県黒森歌舞伎の2つだけなんです。大鹿独自の質の高い地芝居を味わっていただければと思います」

大鹿村は平安時代に荘園が出来、『吾妻鏡』に大河原鹿塩の所領の名が登場している。戦前戦後も途絶えることなく上演され、昭和61年に財団法人大鹿歌舞伎保存会が発足した。平成8年に国選定無形民俗文化財に指定され、翌年から文化庁支援事業として「大鹿歌舞伎地芝居伝承塾」を3年間開催した。

「ろくべん」食べて酒飲んで

舞台ではベテラン大工に若者も加わって手慣れた様子で、舞台づくりをしている。裏の楽屋では4、5人の主婦たちが衣装、着付けの準備をし、開催の口上を述べる宮下寛夫村長に着替えを促している。歌舞伎保存会の片桐登理事も来て、歌舞伎上演前に行う式典を村長と打ち合せをする。衣装係の責任者として働いているのが片桐さんの奥さん、清恵さん。主婦たちの手で「義経腰越状」に出演する遠藤由美子さん、神田江梨奈さんも化粧を終えて着物姿に変身中だ。五斗兵衛の妻役を演じる遠藤さんは村内の商店の看板娘で、5年ぶりの大役。その娘役の神田さんは初めての大役で、家を出て飯田市のパン屋さんに勤務しているが、練習のため週末

▲「義経腰越状・泉三郎館の段」の一こま

▲子役の小島由ちゃん、母親と最後の台詞の稽古

▲立ち見も多い満席の観客席

▲太夫の北村尚幸さんと片桐登さん（右）

▶舞台前へ行っておひねりを投げる母親と子供

▲開演の挨拶を述べる宮下寛夫村長

毎に帰郷、ここ一週間は実家に滞在して練習してきたという。女性は長い着物の裾を引きずるので、そのための練習も必要だ。

「大鹿では衣装も小道具もすべて長年使われて来た貴重なものが残っています。何億円の財産です。この膨大な衣装の出し入れや保管が大変なんです」と片桐登さんは言う。

さて、そうこうするうちに午前11時。客席を見ると席はびっしり人で埋まり、皆楽しそうに昼食を広げている。昔から酒を飲み「ろくべん」というお弁当を食べるのが習わしだそうで、我々も村営宿舎「赤石荘」が作った特製弁当（1200円）を手配した。他に地区のお母さんが早朝から用意した栗ご飯、松茸ご飯などもとぶように売れている。中には手作りの三段重箱を酒のつまみに賑やかに宴会を開いているグループもある。「大鹿歌舞伎を愛するものの手仕事」と配付された公演パンフレット（100円）には「今日も、酒の肴に歌舞伎をどうぞ」と粋な文章が載っていた。

役者の名調子にお花（おひねり）が飛ぶ

太陽が頭上に来て真夏日のような正午、いよいよ開幕。裃紋付姿で座り、開幕の口上を述べるのは宮下寛夫村長。満席のお礼を述べた後「保存会の人たちも高齢化していますので、他村の人もぜひ参加してください。役者が見得を切った時はお花の方もよろしくお願い申し上げます。ろくべんもまだ余裕がありますので、飲みながら楽しくご鑑賞ください」と述べて、会場をわかせた。

そのあと特別企画として池田精孝さんの表彰が行われ、”ミス桜（近隣町村から募集、大鹿村のイベントに参加する）”の女性2人が花束等を贈呈した。池田さんは東京調布市で内科医院を開業する医師だが、大鹿歌舞伎に魅せられて23年間通い続け、海外へも同行。村びとと交流し、写真を撮り続けてきた。大鹿歌舞伎を全国に紹介、写真集も何冊か刊行されて、皆から歌舞伎の博士として尊敬され親しまれている。

もう一人、映画監督の後藤俊夫さんが壇上へ。来年から大鹿歌舞伎等の地芝居を題材にした劇映画を制作することが報告された。自然や生き物をテーマに数々の映画を手がけて来た後藤監督は、伊那谷が気に入って隣接する飯島町に住んでいる。2年間かけて満足できる作品を制作したいと語った。

続いて「義経腰越状・泉三郎館の段」がはじまった。舞台の右手上段に設けられた席から太夫北村尚幸さんの力強い三味線が始まると、会場は水を打ったように静かになり、左手から酔っ払いの五斗兵衛とそれを案じる妻娘が登場した。

歌舞伎特有の発声を見事に身に付けた台詞まわし、堂々とした演技、目線ひとつにも配慮が感じられ、プロの役者と変わらない名演技だ。泣かせる台詞や見得を切るシーンになると、座席から「よっ！くにちゃ」などと声がかかり、お花（おひねり）がぽんぽん投げられる。父親が演じているのか、舞台前に娘と孫が現れ、孫は手提げ袋にいっぱい入ったおひねりを次々と投げた。舞台に届かないおひねりは係りの男性が投げ直し、舞台は真っ白になっている。ちなみにおひねりは、白い和紙かティッシュに百円玉を4～5個包んだもので、入場料を取らない地芝居の大切な収入源になっている。

約1時間の上演のあとは15分程休憩があり、人気の演目「奥州安達原三段目・袖萩祭文の段」がはじまった。身分の高い家の娘でありながら浪人と一緒になったため家を勘当された袖萩は、今は目も見えなくなり、娘のお君に手を引かれて物乞いをしている。粉雪が舞う夕暮れ、両親の住む家に来た母娘だが、頑固な父親は門を開けようとしない。複雑で悲しい物語りを弾き語るのはベテラン太夫・片桐登さん。袖萩役は公民館長の下沢敏さんが女形で演じ「何度やっても難しい」と語る。その娘役が小島由ちゃん。唯一の子役で、客席からは声援とおひねりが凄い。この「奥州～」には沢山のベテラン役者に混じって若者も多数登場する。ヘルパー、会社勤めの若い女性、役場勤務の男性3人など、今後の大鹿歌舞伎を担っていく人たちだ。袖萩が死に父親が切腹するなどの悲話だが、ラストには男たちが派手に六方を踏みながら舞台狭しと踊り、大鹿歌舞伎の醍醐味を堪能させてくれた。

レパートリーは常に15演目以上。今年の春（5月3日）大磯神社で開催する定期公演には何が登場するか、今から楽しみである。

（文／浅井登美子　カメラ／井上進）

大鹿村教育委員会又は産業課　☎0265-39-2100

「奥州安達原三段目・袖萩祭文の段」のシーン

北の漁村の元気な青年劇団

浜益小劇場

北海道 浜益村

「浜益小劇場」は、北海道浜益村を拠点に活動を続ける素人劇団。村の歴史とかかわりの深いテーマを取り上げた手作りの芝居を続け、平成14年に「過疎地域自立促進連盟・会長賞」を受賞した。過疎の村を元気にする芝居とはどのようなものなのか――村民文化祭での公演を観るために晩秋の浜益村を訪ねた。

村民の1割以上が参加する素人劇団

浜益村は、札幌の北およそ80キロに位置する、日本海に面した漁村である。江戸時代から昭和の初めにかけて鰊漁で栄えたが、鰊が姿を消すとともに衰退し、最盛期には1万人ほどあった人口が今では2200人足らずとなった。

かつては演劇が盛んで、村の青年団が全国コンクールで優勝したこともある。しかし、過疎化とともに演劇活動も衰退。消えかけたその伝統を復活させ、村を活性化させたいとの思いから、芝居の好きな村の若者が集まって、平成11年に結成したのが「浜益小劇場」だ。

取材に訪れた日、団員たちは「浜益村ふれあいセンター・きらり」でリハーサルの最中だった。村民文化祭の公演を翌日に控え、舞台上の子役たちに、最後の演技指導をする監督の吉弘文人さん。

「舞台に上がったら心のスイッチを切り替えてください。僕らはアマチュア劇団だが、アマのプライドを持って演じよう」

吉弘さんの本業は小学校の先生。どうりで、言葉の一つ一つに説得力があるはずだ。一方、演技をする子供たちのほうにも甘えやテレはなく、客席で見学しているこちらにまで、張り詰めた空気が伝わってくるようだ。

「浜益小劇場」の名が広く知られるようになったのは、村の歴史を描いた「鰊」という劇で、平成14年に、「過疎地域自立活性化優良事例・会長賞」を受賞したことによる。地元の若者が中心となって自発的に演劇活動をはじめたことで、村民の地域への愛着心を高め、地域を元気づけているというのが受賞の理由だ。

結成当初6人だった団員は、現在40人にまで増えた。これまでに14回の公演を行い、次第に観客も増加。最近は村の人口の1割を超える300人近い村民が何らかの形で公演に参加しているという。

元中学の教員住宅を劇団の稽古場に

「浜益小劇場」には、核となる3人の男性がいる。まずは、劇団代表の佐々木茂雄さん（本業は農業）。大らかで愉快な人物だ。脚本・監督を担当している吉弘文人さんは、”劇団のブレー

▲子供たちの演技も堂に入っている

◀リハーサル中に監督の吉弘さんから注意事項が伝えられる

▶日本海に向かって伸びる坂道の両側に家が建ち並ぶ浜益の町

◀郷土資料館は明治32年に建てられたニシン番屋を改修復元したもの

上／浜益小劇場の稽古場は、元中学の教員住宅だった
下／ふれあいセンター「きらり」

ン“的存在。団員の中に、子供とその家族が多いのは、教師としての彼の人望の篤さを物語っている。そして、ソフトな人当たりの宇野博徳さん（本業は役場職員）が劇団事務局を仕切る。3人のうち、どの一人が欠けても劇団は成り立たないにちがいない。

佐々木さんが劇団結成時を振り返って言う。

「宇野君から劇団を結成しようと話を持ちかけられたのと時と同じくして、地元の縄文土偶作家から、砂浜で個展を開きたいので、最終日に舞台をやらないかと相談があったんです。彼の個展のテーマが”沖縄“だったので、「南十字星」という沖縄をテーマにした野外劇を砂浜でしました。実は、この脚本は、吉弘さんが前々から温めていたものだったんです。すべてがタイミングよく合致したんですね」

こうして、勢いに乗って旗揚げ公演をやったはいいが、脱力感からか、その後一年間、活動が休止状態になってしまった。ところが、

「吉弘さんが、元中学の教員住宅だった古い家を劇団の稽古場として買ったことで、また芝居熱が再燃したんです。それまでは練習をするのも、会議を開くのも、公共の施設を借りていたので、夜の9時ぐらいになるとやめなきゃならなかった。それが、僕らの基地ができたことで、好きなときに、一晩中でも稽古できる。これで一挙にはずみがついたんですよ」

余談になるが、この住宅は廃屋同然だったため70万円という安さで手に入れた。しかし、屋根が老朽化していたため、葺き替えたら、修理費が40万円もかかったとか。

「赤や青のカラートタンの屋根にしたらもっと安くすむのに、”鰊暮り“をイメージしたシルバーの屋根にしたいなんて、みんなわけのわからないことを言うんです（笑い）」

失敗談や苦労話も佐々木代表の手にかかるとすべて笑い話だ。劇団の経済状態についても、

「うちは、年会費２０００円を団員たちが出し合って運営していて、補助金は一切受けていないんです。事務所の光熱費やメイク・衣裳などの消耗品も、すべてそこからまかなっています。貧乏だけど、だれにも干渉されないで、自由に演劇活動をやっているのが、うちの劇団のいい点でしょう。今のところ赤字にならないでやっていますしね」

と、いたって楽天的。お金がない分、村のお年寄りが昔の衣裳を提供してくれたり、観客の送迎のために運転手を買って出てくれる人がいたり、団員以外の人たちの協力に支えられているという。

鰊漁で栄えた村の歴史を芝居に

浜益小劇場の代表作「鰊」が誕生したいきさつについて、今度は吉弘さんが語ってくれた。

「稽古場ができたことで、団員たちの夢が広がり始めたんですね。それまでは、持ち込まれた企画にのっかかっていたんですが、今度は、自分たちでチケットを売って、お客さんを呼んで、公演の準備をして……、全部僕らだけでやる公演をしようと考えたわけです。そこで、何を演じるか？となったときに、浜益の歴史をテーマにしようという話になったんです」

浜益は鰊によって栄えた村だから、鰊を抜きに村の歴史は語れない。そう結論づけた彼らは、村のお年寄りに聞き込みをしたり、村史を読み漁ったりして、村と鰊の関係を調べた。

「やっているうちに、これは10時間ぐらいの芝居になりそうだと思いました。それくらい鰊の歴史は深かった。それで、〈鰊漁が始まった時代〉〈黄金時代といわれた時代〉それから〈鰊がとれなくなる時代〉の”三部作“にすることにしたんです」

最初に公演したのは、鰊がとれなくなった頃の話。その背景には、自然環境の悪化や乱獲、戦争など、さまざまな問題がある。時代の流れに翻弄されながらも、村人たちは「いつかまた鰊は帰って来る」と夢見たが、結局、自分たちが追い求めていたのは、「幻の魚」なんかじゃなくて、あの頃の暮らしだったんじゃないかと気づく――。村の歴史に題材をとった芝居は、お年寄りから子供まで幅広い層に共感を与えたことはいうまでもない。

「うちの劇団は、『現在、過去、未来を感動でつなぐ』をキャッチフレーズにしています。去年までの3年間は〈過去の鰊〉をやり、今年は

右／村の歴史を描いた「鰊」という劇で、平成14年に「過疎地域自立活性化優良事例・会長賞」を受賞した
左／劇団代表の佐々木さん

〈現代のトド問題〉をやりました。このあたりもトドの被害が大きいのですが、国際保護獣なので漁師たちは手の打ちようがないんです。というわけで、今後は、〈未来の浜益〉をテーマにしたものをやりたいですね」

浜益版「水戸黄門」に沸く！

村民文化祭の日がやってきた。会場となった浜益村ふれあいセンター「きらり」では、朝の10時すぎから民謡や日本舞踊、カラオケなど、村民たちの演芸が次々と発表されていた。

一方、昼頃「きらり」に集まってきた団員たちは、午後1時45分の開演に備えて、メイクや衣装の準備に余念がない。会場を覗いてみると、午前中は空きの目立っていた客席に続々と人が座り出している。180席用意された椅子と、その前列に敷かれたゴザも満席。村の人たちはかなり芝居に期待しているようだ。

さて、この日の演目は「水戸黄門――山を越えたホタテ漁師」。黄門様ご一行が浜益を訪れて、村人たちを苦しめている悪人を懲らしめるという、おなじみのストーリーをお笑い路線に仕上げた芝居だ。幕が開いて、黄門さまに扮した佐々木代表が現れると、客席から「イエイ」「おーい！」などの野次が飛ぶ。演じる方も、観るほうも、みんなノリノリで楽しんでいる様子だ。

それにしても、テレビやゲームなど娯楽がたくさんある時代に、なぜこの村では芝居がこれほど楽しみにされるのだろう。素朴な疑問を宇野さんにぶつけてみたら、

「芝居が社交の場になっているのだと思います。みんなで同じ空間を共有し、芝居を見て泣いたり、笑ったり……。もちろん、僕たち団員も、一緒に練習したり、触れ合うことで、苦しい時もあるけれど、1つのものを作り上げる達成感を得ています。これは、ひとりでゲームをする楽しさとは違った満足感なんです。演劇自体も好きだけど、みんなが同じ目標に向かってコミュニケーションしながら作り上げていく過程に喜びがあるんですね」

仲間とともに演じることを思い切り楽しむ団員。そして、それを温かく見守る村の人たち。立派な施設を建てたり、莫大な費用をかけたりしなくても、地域を元気にすることができるということを、彼らが証明してくれている。地域おこしの1つの在り方に、気づかされた思いだった。

（文／小田礼子　写真／小林恵）

▲「浜益小劇場」には、親子や兄弟など、家族ぐるみで演劇活動をしている人も多い

▲拍手喝さいのうちに幕を閉じた「水戸黄門」

▶メイクや衣裳合わせも手馴れたもの

浜益村役場商工観光課
☎0133-79-2111

「無名塾」と夢を育む演劇文化のまち

能登演劇堂

石川県七尾市 旧中島町

「いのちぼうにふろう物語」ラストシーン

仲代達矢さん主宰「無名塾」の『いのちぼうにふろう物語』のロングラン公演が能登演劇堂で幕を開けた。7年ぶりの再演で9月23日から10月20日までの約1ヵ月間という地域の劇場としては異例の公演。劇場は連日観客で満席となり、無数の御用提灯がゆらめく外舞台を使った能登演劇堂ならではの迫力ある舞台に客席は大歓声に包まれた。

仲代達矢『無名塾』と中島町との出会い

『いのちぼうにふろう物語』は山本周五郎の短編「深川安楽亭」を仲代達矢さんの妻、脚本家・演出家・女優である宮崎恭子さん（筆名／隆巴）が劇作化したが、宮崎さんは能登演劇堂用に脚本が完成した平成8年に逝去され、翌9年に遺作はロングラン公演された。

仲代さん一家が能登旅行で旧中島町を訪れたのは昭和58年、以来60年から無名塾の舞台稽古が中島町で行われて来た。「いのちぼうにふろう物語」ロングラン公演の後もシェークスピア作「リチャード三世」「ウィンザーの陽気な女房たち」、ゴーリキー作「どん底」、妹尾河童舞台美術「森は生きている」などが毎年ロングラン公演されてきた。

ホールロビーには、これらの演劇の名場面写真と仲代さんらが着用した衣装や資料の展示会と、宮崎恭子さんが病床で絵筆で描いた仲代達矢さんへのメッセージ等が特別展示されている。これらを見て珈琲を飲んでくつろぐ女性客や中年夫婦の姿も多く、町と無名塾の親密な交流により、能登演劇堂がこの地方の文化拠点になっていることが伺える。

「いのちぼうにふろう物語」開演（午後4時）前の多忙な時間にも関わらず、仲代達矢さんが我々のインタビューに気軽に応じてくれた。

『いのち～』は半年間で146回公演しますが、100回以上が地方です。昔から地方との関係が深く、縁あって中島町では20年前から稽古で合宿させていただき、公演も8年になります」と語り、中島町との出会い、演劇堂建設の際のコンセプト、地方公演の魅力などについて、予定時間を越えてお話してくれた。（26頁に詳細）

"演劇"の町づくりを住民皆が支える

金沢から能登有料道路で横田I・C下車。左手に行くと和倉温泉、真直ぐ行くとやがて美しい田園風景の中に沢山の旗がはためく能登演劇堂が見えて来た。クルマで約1時間、昨年オープンした能登空港からは20～30分の距離だ。

すでに劇場の入口前には食べ物や能登の特産品等を売るお母さんたちの市が立ち、手作りの松茸、牡蠣弁当や熱い珈琲や飲物、和菓子等を販売している。受付では石川県立中島高校演劇科の女子高生、ロビーではガイド係のボランティア女性が準備中。関西から来たという夫婦は「この温かい雰囲気がいいですね」と言って芝生で弁当を開けていた。

能登演劇堂は（財）演劇の町振興事業団が運

能登演劇堂との出会いを語る仲代達矢さん

▼開演1時間前には玄関前の売店やロビーには遠方からやってきた観客で大賑わい。下はボランティアで働く中島町の婦人たち

営している。事務局長の山田理平さんにお話を聞いた。

「仲代さんからこんな静かなところで稽古できたらという話があった頃、町では中能登広域文化行政の一環として目的別整備構想を策定、どんな文化施設がふさわしいか検討していたのです。それで無名塾の合宿が実現したのですが、この合宿は民家や国民宿舎に泊まって体育館等で行われ、ある時期に稽古を町民に公開します。厳しくきびきびしたプロたちの稽古を見て町民や演劇愛好者は大変驚き感動しました」

稽古の仕上がりを見たいと無名塾の公演地へツアーを組んで行く人もいたほどだという。

そこで次のプロセスとして"演劇文化を能登から発信する"ため、演劇堂の建設に着手し、行政と民間、住民による振興協会（後に振興事業団）が誕生した。「友の会」会員は2000名を越え、賛助会員には町内外の企業や商店の120社が加入し、運営を支えている。

無名塾と町民との交流は演劇の公演だけにとどまらず、成人式やイベントにも塾関係者が参加するという。

『いのちぼうにふろう物語』はおかげさまで連日満席で、今年は各地の演劇ファンがバスツアーで訪れています。

能登演劇堂開設に伴って結成した町民劇団では30人の会員が熱心に活動を続け、公演会は今年で7回目、かなりレベルが高い芝居をしています。中島高校演劇部の公演も演劇堂で実施するようになり、生徒たちの取り組みにも一段と熱が入ってきました。

能登周辺は定住人口が減っていますが、交流人口は増やしていきたい。それが演劇です。演劇は儲かるものではなく、時間もかかりますが、子供たちが20代、30代になった時質の高い観客になり、その中からここの演劇を担う人やグループが出てくるのではないかと期待しています」と山田さんは言う。

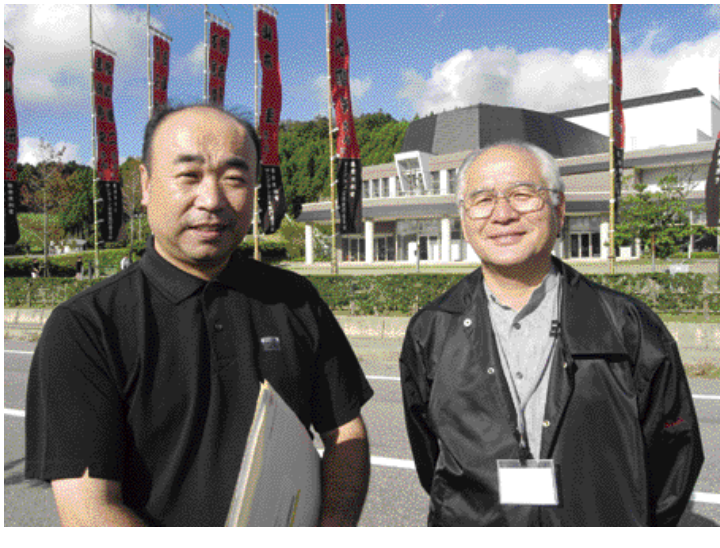
町民劇団は一昨年は「竹取り物語」、昨年は「夕鶴」を公演し、今年はバーナード・ショーの「ビグマリオン」を公演して高い評価を受けている。能登の地に根付きはじめた質の高い演劇文化の風土は、年間の公演プログラムにも反映されている。2004年の主な公演は、4月が永井愛演出、新国立劇場制作「こんにちは、母さん」（加藤治子、平田満他）、6月が岩崎宏美コンサート、7月が江守徹演出「時の物置」（有馬稲子、辰巳琢郎他）、8月が池田政之演出「嫁も姑も皆幽霊」（田村亮、音無美紀子他）、2月が宮本亜門演出ミュージカル「ファンタスティック」などで平均週末の3日間公演。月一回、これらの芝居を鑑賞する、ここの住民たちは何と贅沢で豊かな時間を有していることだろう。

演劇を通して成長する

石川県立中島高校演劇科の教諭で町民劇団員でもある酒井藤雄先生は、開演前に「いのち～」のエキストラや受付係をする生徒たちを気づかって忙しい。

「私は中島高校の出身で、国語教師として赴任したのですが、当校に新設した演劇科の主任として関わるようになりました。教室でいろいろ学ぶことも大切ですが、仲代さんの指導や無名塾の真剣な稽古を見ることの効果は大きく、生徒は凄く変わり、グンと成長します。『いのち～』ではエキストラで出ますが、ラストの"御用だ"シーンのために雨の中でも寒さの中でもじっと愚痴ひとつ言わず野外で待機します。

私は演劇科に入って来た生徒に『芸能界に憧れるのではなく、その夢をあきらめるために演



能登演劇堂を背景に山田理平事務局長(右)と中島高校酒井藤雄教諭

「御用だ」のラストシーンに出演準備をする中島高校演劇科の男子生徒。下は受付やガイドをする女子生徒たち

劇科がある』とよく言います。その上で演劇を学ぶことの素晴らしさや大切さ、努力することを身につけていって欲しい。今は女子生徒の入学が多く、半分は他所からきて下宿しています。いずれこの地から多くの演劇人が誕生すると期待しています」と語っていた。

話題　感動のラストシーン

さて、午後4時も近づいていよいよ開幕。特別展示した宮崎恭子さんのスケッチ画等を観て、静かにその時を待っていた観客が黒色で統一された劇場に入って行く。

客席のライトが消されると真っ暗い闇となり、やがて舞台に深川べりに建つ茶屋が現れた。亭主（仲代達矢）が厨房で包丁を研いでいる。店では荒くれの若者たちがお喋りし、川辺には船荷が着く――。山本圭さんをはじめ無名塾の著名な役者が30人も出演する大スペクタルドラマ。

今回、幾つかの素人芝居や郷土芸能を見て来た私は、プロたちの演技力や一瞬たりとも客を待たせないスピーディーで変化に富んだ場づくりとドラマの展開に「さすが凄い」と改めて感嘆した。そしてラストのチャンバラシーンがやってきた。いつの間にか後の壁が観音開きに開いていて、実際の山林と池が現れる。そこに「御用だ」「御用だ」と無数の提灯が揺らめきながら近づいてくる。舞台の外と内を自在に行き交いながらの壮絶なチャンバラは、世界でもここ能登演劇堂だけのものだろう。

恋人の男女を助けようと命を張って悪に立ち向かう亭主や若者たちが危ないというのに、会場からは大歓声と拍手が湧き、フィナーレとなった。先に仲代さんが「悲しいラストシーンなのになぜか拍手が湧きます」といった言葉を思い出しながら、私も一生懸命拍手していた。それなのに見終わるとこころが熱くなりもの悲しい。その感動が観客を捉えているようで、人々の群れはいつまでも劇場の内外にとどまっていた。夜風が心地いい。

地方には質の高い演劇育成の風土がある

■仲代達矢氏インタビュー

●役者と観客が身近にふれあえる劇場

僕は東京生まれ東京育ちですが、東京は不思議なところで、東京が中心で地方があるという考えが明治維新からある。日本中のいろんな人が集まって来ているところで、ふる里という感じがしません。

僕らは仕事柄全国を廻っています。金沢までは来ていましたが能登へは足を伸ばしていなかった。昭和58年、たまたま一週間ほど空いたので、能登へ行ってみないかと女房（宮崎恭子さん）とクルマで来たんです。僕らの芝居を演出する林清人さんの知り合いが中島町にいたので、そこを拠点に廻ってみようと。万葉集にも登場する古代ロマンの里で、食べ物も美味しい。まず何よりも気に入ったのは静けさでした。こういうところで若者たちがのんびり芝居の稽古ができたらいいなと思ったのがきっかけでした。そしたら、無名塾の若者との交流を含めて一年に一回位合宿に来ませんかと町から話があり、私たちは稽古場がなくて転々としていましたので、翌々年からここでお世話になることになりました。

当時能登には演劇専門の上演館がありませんでした。他地区もそうですが、ホールはあるが、大きいものはいいことだと1000席、2000席の多目的ホールを建設する。音楽会も政治家の講演会もなんでもやり、ある町が大きいものを建てると隣の町はもっとキャパの大きいものを建てるという時代でした。

しかし演劇の場合はブロードウェイを含めて1000席までが基本。どこからもよく観えて役者の肌や汗も身近に感じられる劇場は600席位までがいい。日本の劇場の多くが少しでも客を入れようとしてその分舞台が狭いので、芝居に制約が生じていました。小さくても精度の高い芝居をやるためには舞台の奥行もたっぷり必要です。そうしたら「それを当町で作りましょう」と言われたんですね。言い出しっぺのくせに「ちょっと待ってください」と私。建物は出来てもあとのソフトが心配でした。

左／仲代達矢氏による中島高校演劇科生徒の特別講議（能登演劇堂）
右／中島町民劇団公演「夕鶴」（2002年）

「いのちぼうにふろう物語」舞台となる深川安楽亭(上)とラストの壮絶なチャンバラシーン

いろいろな人が意見しあうと纏まらないので結局僕に劇場建設の監修が全部まかされました。ここの自然を取り入れたいと舞台奥の大扉が開いて裏手の林を借景にするアイデアでは、船のハッチを開ける技術をいかして三井船舶の技術者が協力してくれました。ロビーも劇場も装飾等はできるだけ排除し、その分客席の心地よさ(輪島の塗黒を施した客席、壁面と木の椅子)と照明や音響等の最新技術導入に力を入れました。

毎年、無名塾の稽古場で二ヵ月余の稽古をやり、最後の10日間を演劇堂でします。町へ来た頃は「なぜ中島町が学習塾を呼ばなきゃならないんだ」と言う人もいたようです。無名塾といっても知らないわけですから。十年も経つと行き会う人の名前も覚え、「また来る季節になったか」といわれる関係になりました。

平成16年は1市3町が合併して新七尾市(ななおし)となり、その誕生祝賀として公演しています。今までは中島町の7000人のサポーターが支えてくれましたが、これからは劇場は新七尾市の6万人のものになります。数字の上ではいいのですが、中島町の皆さんが一生懸命盛り上げてくれたようにやっていけるだろうか、集中度の問題で、6万人が自分達の劇場だと思ってくれるだろうか心配です。演劇の場合、観客数が増えて儲かるとか経済効果があるというものではない。精神的なもの、こころの豊かさを求めるもので、情操教育の一つだと思います。

ヨーロッパではモリエールの時代から王様や金持ちがパトロンになったり国が演劇などの文化を育成してきましたが、日本では今まで政治も企業も文化の育成に熱心ではありませんでした。我々がいなくなっても演劇堂は建っています。次の若い演劇の担い手が育ち文化風土が根付くまで国の地方文化政策として援助していって欲しいと願っています。

「いのちぼうにふろう物語」では地元の人はもとより、東京や関西、九州からもわざわざ観に来てくれ、「ここまできて本当に良かった」という感想が寄せられます。それは何だろうと考えると、能登の自然や人情にふれ、温泉に入り美味しい牡蠣などを食べて芝居を観て帰る、そんな非日常性がいいんですね。これも町の人たちが努力してくれ、我々も中島町を拠点に活動しているからでしょう。

能登のあとは函館、旭川、釧路など北海道を公演します。演劇観賞団体、通称"演鑑"というのがあり、毎年お客さんを集めて待っていてくれます。地方の人たちの方が年間7、8本は質の高い芝居などを観ていますので、とても目が肥えています。テレビではなく観たいものを呼んで直接真近で鑑賞したいという熱心な人たちが多いんです。東京の人は、いつでも観られると思っているから結局何も観ないという人が多いでしょ。女房が「私たちは待っていてくれる人たちを訪ねる巡礼旅だね」と言っていましたが、これからも地方を一番大切にしていきたいと思います。

●能登演劇堂ならではの舞台演出

能登演劇堂での「いのち～」の場合は、ラストに地元の人たち30人がエキストラで出演するのが特色です。無名塾が来てから中島高校に演劇部が出来ましたが、そこの学生も皆出るので大人数で困る程。原作は淡々としたものなのですが、後ろの扉が開いて御用御用で30名が入り込んでくるというスペクタクルにしています。自然の空間までを劇場にしているのはここ能登演劇堂だけでしょう。本来は敵に捕らえられて死んでいく悲しいラストシーンなのですが、なぜか客席は拍手で沸き上がります。これを観たある作家が「芝居というものは理屈ぬきの一種のコーフンなんですね」と言っていました。

いずれこの土地の風土に適した芝居を若い役者や地元の人たちでやってもらいたいと思っています。演劇堂が出来、高校に演劇科が開設されてから、皆の目が輝いてきました。この中から、ここで芝居をやっていこうという人が出て来たら素敵ですね。

いまの子供たちにも演劇を通じていろいろ学んで欲しい。芝居はまず礼儀作法から入り、自分を表現していくこと、人を理解すること、そして皆で作り上げていくという、いわゆる人間教育なんです。日本には国立の演劇学校一つありませんので、我々がその手伝いをしていかなければと思っています。

(文／浅井登美子　カメラ／小林恵)

能登演劇堂　☎0767-66-2323

中学生も高齢者も年に一度は“役者”する
ゆだ文化創造館「銀河ホール」（岩手県湯田町）

演劇による町づくりをめざしている湯田町（ゆだまち）では、中学生や一般、高齢者を対象にした「演劇塾」を10数年前から開校。湯田中学校では秋の文化祭にクラス対抗で演劇を公演、小学生も宮沢賢治作品に取り組むなど、演劇塾や演劇講座は確実に成果を上げている。晩秋の日曜日、中学生たちの演劇を見に出かけた。

▲銀河ホールとUホール（右）

銀河ホール、舞台から客席を望む

●地域演劇活動の拠点に

前日湯川温泉「大盛館栖峰」という銀河ホールに比較的近い宿に宿泊、翌朝宿のご主人が送ってくれて8時半に銀河ホールに着くと、湯田中学校生徒たちが練習する合唱曲が聞こえて来た。玄関にて午前は演劇発表、午後は合唱コンクールが行われる。

学校を挙げて演劇に取り組んでいるケースは全国でも少ないが、湯田中学校では恒例行事として文化祭に演劇を発表し、全校生徒による練習を行って来た。今年はさらにレベルアップを図ろうと県内外の劇団演出家やロシアの演出家が指導に当たる「演劇塾」を開校した。開幕が楽しみである。

古くから鉱山や温泉で栄えてきた湯田町は、開放的な気質と多様な文化の流入という風土の中で、独自の芸能や地域文化が生まれ育ち、とりわけ演劇は長い歴史をもっている。そんな風土を反映して平成5年に「93いわて国民文化祭」演劇祭の会場になり、それを機にゆだ文化創造館「銀河ホール」が建設された。338席、桟敷席もある木の温もりがする中ホールで、ほっとゆだ駅から徒歩4分、湯田ダム錦秋湖畔に面している。さらに7年にはミニコンサートやリハーサル、展示会等多目的に使える小さな宇宙空間「Uホール」がオープンした。

ゆだ文化創造館「銀河ホール」の生涯学習文化課長の新田満さんは「湯田町と銀河ホールを語る上で、岩手ぶどう座の存在を欠くことはできません。戦後間もない昭和25年に川村光夫さん主宰の劇団が誕生し、この地を中心に演劇活動を行って来ました。銀河ホール建設の際には町と川村さんが各地の劇場を見学し、演劇のメッセージをいきいきと観客に伝える客席と舞台が一体化した湯田独自の劇場を造りたいと、演劇に詳しい清水裕

「地域演劇祭」のパンフレット

之（名古屋大）に設計を頼みました」と語る。

設備面で目につくのが、正面入口に立ち並ぶ9本の柱。廃屋になった農家からもらい受けて来たものだという。客席の両側に設置した芝居小屋風の桟敷席は取り外しが出来、車椅子や花道にもなる。客席の後方には子供連れが観賞できるガラス張りの小部屋もある。

もう一つの特徴が、舞台前の壁に組み込まれた百個の石。住民が思い思いに持ち寄り、舞台さらには町を支えていこうという意志を象徴したものだという。

銀河ホール秋の重要事業が9月に開催される「地域演劇祭」。全国各地の演劇活動に影響を与えて来た岩手ぶどう座と各地で活躍するアマチュア劇団の公演が2日間行われ、昨年で12回目、平成15年には「地域演劇賞」を設けて、地域で演劇文化活動を行う団体を支援している。

●身近なテーマを皆が演じる㎜考える

さて、9時になると客席は父兄や小学生たちで埋まり、湯田中学校文化祭・演劇部門の開演。開幕宣言のあと生徒会会長が「一ヵ月間一生懸命練習しました。今年はプロの方の指導があり大変よかった。継往開来のスローガンに基づいてがんばります」とあいさつ。続いて嶽間澤茂校長が「専門家の指導のもと、ホールで公演できることは生徒にとって大変有意義なことです。演劇の素晴らしさは役者の他に舞台づくり、照明、音響など皆が力を合わせて出来ること、楽しみです」とあいさつして、開幕した。

1年生は、仲良し5人組の一人が事故死し、皆で事故現場を訪ねるという『夏の約束』。バスに乗るシーン、郊外を歩くシーンなど、背景の絵を変えたり仕種で見せるなど工夫が見られる。2年Aの『棄権』は運動会を間近にしながらマラソン選手のなり手がなく、結局体力のない少年が立候補する。びりを必死に走る姿に皆の気持が一つになっていく。舞台演出もよく一人ひとりの個性が出ていた。2年Bは病気で入院している6人の子供達のドラマ『青空へつづる手紙』。陽気だった少年が死ぬことで、生きることの大切さを訴えるが、男子たちの演技力が抜群で、笑いと涙を誘った。ラストは3年生の『二つの名前』という韓国籍をもつ少女をめぐる話で、いたずら3人組やクラスの大半が出るディスカッション風ドラマ。花道や照明等を生かして独

▲「青空へつづる手紙」

▲「夏の約束」

▲「棄権」

▲1年A組、演出の女子生徒らと見守る新田さん

嶽間澤茂校長。4月に赴任、湯田中学校伝統の演劇活動を今後も引き継いでいきたいと語る

演技が上手、役者気分の主演西方千還君（2年B組）

▲照明室で機器の操作をする男子生徒たち

▶岩手ぶどう座「おばあさんと酒と役人」（上）、「うたよみざる」（下）の公演（作・演出／川村光夫）
▼高齢者演劇「かっけんころころ雑の声」

白する少年をクローズアップするなど、ホール設備を上手に使っていた。

4作品が終って新田課長ら4人の指導者が講評をした。「100点満点95点をあげたい」「照明など上手に使っていたが、それに頼り過ぎないこと」「ひとり一人の意見をまとめて作りあげることの大変さと、熱意と団結があればやれるということを学んだと思う」等の感想が語られた。

いま中学生たちが抱える身近なテーマを普段着で演じていたが、観客の生徒や父兄も共に感じ、考え、明日に夢を託すという一体感が感じられた。改めて演劇というものの魅力と大切さを学んだ気がする。

●町民総参加の演劇の町へ

銀河ホール事務所へ行くと、岩手ぶどう座の女優、柏崎栄子さんがいた。

「東京からぶどう座に惹かれて湯田へ来てしまいました。生涯学習課で働く主人と結婚し普段はぶどう座の事務的なことを手伝っています。現在役者は15人ほどいますが、地方公演や最近ではロシアなどの長期公演もあるので、仕事はしていても休職できることが必要ですね。演劇塾等で学んで将来舞台をやりたいという人が出て来ていますが、川村先生はかなり厳しいので若い人はぶどう座には入りにくいかな。でも頑張って挑戦してほしいですね」と言う。

川村光夫さんは今年82歳。その昔役場に勤めながら演劇をムラおこしのひとつだとして脚本・演出を手がけ、山間の村々で公演してきた。代表演目に「うたよみざる」「がんとり」等があり、数多くの作品を世に送りだしている。昨年地域演劇祭で公演した「おばあさんと酒と役人と」「イト婆っぱ物語」は40年前に初演した人気劇で、ロシアでの親善公演でも好評を博した。

舞台の楽しさを広めたいと銀河ホールが開設している演劇講座は今年で11回目を迎える。中学生以上なら誰でも参加出来、毎年15名ほどが入学している。演劇の基礎を学んだ後は劇団の専門家から15回にわたって演技指導を受け、その成果を町の文化祭で公演することになっている。同講座と平行して高齢者や障害者のみが参加する講座と公演もあり、県境を越えての参加が増えている。10回の公演で約140人が出演したという。

この企画と運営、指導に当たって来た新田さんは、銀河ホールを核に演劇的風土を広域的に広げる活動にも積極的に取り組んで来た。

「平成10年に県境を越えたそれぞれの劇団が培ってきた個性と情熱を”雪国“のキーワードのもとに集結しようと『雪国演劇ネットワーク合同公演』事業を行い成功しました。これを岩手県、秋田県5市町村の65歳以上を対象とした『高齢者演劇ネットワーク』事業へと継続し、表現することの喜び、仲間づくりを通じて高齢者が自ら舞台役者になり公演するという活動に取り組んでいます。毎年参加者を変えながら6回目となりました」と新田さん。

長い時間をかけながら育って来た演劇観賞や創造基盤等によって、湯田町民の演劇への関心は高いが、いま沢内村との合併問題や地方自治法の一部改正で公的施設の運営に「指定管理者制度」を導入する問題が持ちあがっている。町独自に育てて来た演劇文化が今後どうなるのか、ホールの運営は規正されてしまうのか等の悩みも大きい。

取材／浅井登美子

生涯学習文化課課長新田満さん

銀河ホール　☎0197-82-3240

「置賜こども芸術祭」のフィナーレ

人口2万人弱の町に、20万冊の良質な本を有する図書館と、一流の劇団やアーチスト、地域の青少年などが毎週のように公演する劇場がある川西町。演劇学校や生活者大学も開校し、拠点となるフレンドリープラザはいつも大にぎわい。その原動力となったのが文学や芸術を愛し夢を見続けて来た若者たち、若者の夢に答えたのが川西町出身の作家・井上ひさし氏。井上氏主宰の劇団「こまつ座」が結成され、昭和59年1月に旗揚げ公演が行われ、現在に至っている。

“文化”にふれて、学んで、表現する
川西町 フレンドリープラザ
（山形県川西町）

駐車場にクルマを停めて、フレンドリープラザの玄関へ通じる外廊を歩いていくと、右手にガラス張り2階建ての瀟洒な図書館があり、窓辺には本を読む中学生や高校生らの姿が見える。ギリシャ野外劇のステージを思わせる外廊は、雪除け対策用の外玄関の役割を果たす一方で、人々を演劇や読書といった文化的時間帯へと誘導する役目も担っているのだろう。さらに、プラザへ行く人、帰る人が挨拶を交わす交流の道でもあるようだ。

●膨大な貴重な蔵書「遅筆堂文庫」

玄関を入ると広いロビーがあり、左手が図書館、右手が劇場になっている。

図書館に入ると入口に近い場所の棚に、井上ひさし氏の小説・戯曲・エッセイ等が沢山並んでいる。販売もしてくれるそうで、「あっ、読みたかった本」「こんな著書もあったのか」と思わず手に取ってしまう。その奥に「遅筆堂文庫」と書かれた看板が見える。町立図書館の一階は井上ひさし氏の蔵書を一般に貸出しする図書コーナーと、貸し出しはしないが閲覧は自由にできる「遅筆堂文庫」があり、さらに奥には井上氏の原稿や古書、資料、絶版になっている貴重な本等を収納する保管庫がある。

昨年までフレンドリープラザ館長で現在川西町教育委員会教育長を務める竹田又右衛門さんが早速図書館へ案内してくれた。

「平成6年4月にフレンドリープラザ・図書館が開設し、4ヵ月かけて中央公民館図書館の図書と農村環境改善センターに開架していた井上先生の蔵書を移しました。蔵書は現在20万冊と自治体としては膨大な量を誇り、うち15万冊が井上先生の蔵書です。開館当時は12万冊でしたが、その後も井上先生から年間5000冊（雑誌も含めて）以上送られてくるので、どんどん増えています。初版の本としての価値が高いものが多いんです。遅筆堂文庫に入ると、井上ひさし氏の作家としての原点、社会観等を知ることが出来、日本全国歩いてもここにしかない貴重な本が沢山あります」と竹田さんは言う。

フレンドリープラザ開設と同時に館長に就任した竹田さんは、文化芸術に理解を持つ御大将（井上ひさし氏談）として複合施設を運営、この日もご指名で来町者の出迎えに出かけていった。

フレンドリープラザ。左側が図書館（上）川西町フレンドリープラザ建物と玄関へ通じる外廊下（下）

右／「遅筆堂文庫」、井上ひさし氏の原稿等を収納するコーナー
左／井上氏の著書コーナーを前に、竹田又右衛門教育長

女性職員が遅筆堂の一角にある保管庫に案内してくれた。万年筆できれいに几帳面に書いた井上ひさし氏の小説や芝居の原稿がある。筆が遅く芝居の開演に間に合わなかったという話は有名だが、江戸・明治時代の作家や絵師、職人などを主人公にした芝居などを多く手がけており、徹底的に資料を集めて納得いくまで推敲を重ねて書き上げるために、遅くなるのは当然かもしれない。保管庫に収納した蔵書は歴史書、社会学の専門書なども多く、中には戦前戦後頃の童話の本や井上氏デビューの原点になった「ひょっこりひょうたん島」の単行本もあった。

図書館1階には子供達が靴をぬいで上がり、読書して憩い語らうカーペット敷きのコーナーがあった。小学生の女の子数人が棚から取り出して来た童話を読んでいる。よちよち歩きの子供が嬉しそうに本を見て歩いている。読書をしなくなったといわれる現代っ子たちが本に触れる"出会い発見"のコーナーでもある。

その奥には、木の大きな丸いテーブルがあり、ここでは中学生たちが読書や学習中。「土日には開館と同時に来て夕方まで利用しています。家よりも落ち着いて勉強出来、友だちにも会えるから」と生徒たちは言う。

午後7時まで開館しており、置賜地区の人も利用できるため利用率も高い。この図書館なら、東京から数日の予定で訪ねてみたいものだと真剣に思った。

なお、町内には「ひょっこりひょうたん島」ミニミニ資料館と称する店が5軒ある。井上氏のファンで、例えばドン・ガバチョのグッズなどを集めていた米屋さん、写真館などで、無料で一般に公開している。

●文化事業も盛り沢山

遅筆堂文庫では、こまつ座（所在地／東京都台東区柳橋）の企画で数々の文化事業を行っている。

その筆頭が、校長井上ひさし、教頭山下惣一（農民作家）が務める「生活者大学校」。身近な生活に目を向けようという井上氏の提案で昭和63年8月に4日間の日程で行われた「農業講座」が契機で、農業、水や土、地域と文化等をテーマに毎年1回開催され、全国から多数の受講者がやってくる。第一回目は3泊4日食事代込み1万6千円（63年）という講座で早朝から夜中まで農業体験もある超過密なスケジュール、町民も30数名がボランティアで働いた。

平成2年からスタートした「遅筆堂文庫講演会」も年1～2回開催されてきた人気の事業で、椎名誠、つかこうへい、大江健三郎、大沢在昌、林真理子等の作家が講師として来町している。さらに、自分が文章を書いてレイアウトし本にする「編集講座」、子供やお母さん達に絵本や民話を読み語る「おはなしこんにちは」も15年以上続けられている講座である。

川西町出身とは言え超売れっ子の多忙な井上ひさし氏が町と深く関わることになった背景には、町の青年たちの熱心なラブコール、アプローチがあった。現在こまつ座の営業部長をする遠藤征広さん（48）と仲間たちである。

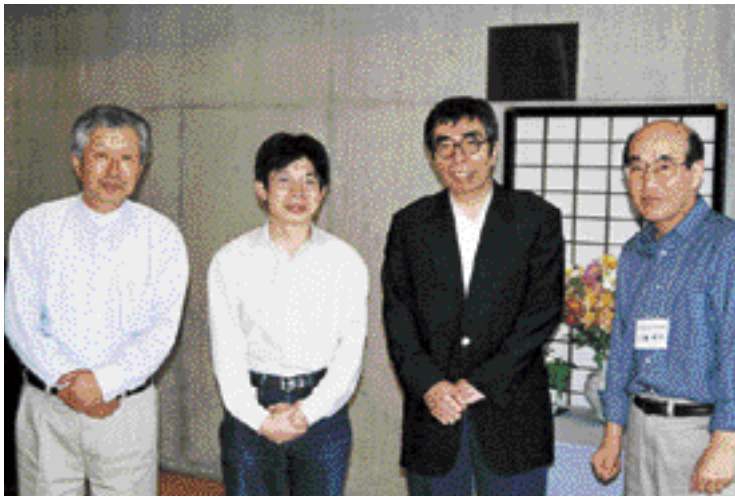
当時町の農協に務めていた遠藤さんは井上ひさしの著書を欠かさず読む文学青年で、仲間たちと同人誌も作っていた。

井上氏は昭和9年川西町（旧小松町）に生まれ、上智大学外国語学科入学を期に町を離れた。学生時代には遠野地方に関心を持ち、それが後の作品に反映されている。大学卒業後間もなくNHKテレビ「ひょっこりひょうたん島」等でデビュー、以来直木賞、岸田戯曲賞等を毎年受賞、作家生活と芝居の演出で多忙な生活を送っていた。

そんな氏に遠藤さんと仲間たちは「井上ひさしを故郷へのラブコール運動」を決意した。「川西町は嫌いですか。お金もないのですが、講演にきてもらえませんか」という主旨の手紙を半年かけて書き投函した。ところが5日

図書館には子供達が靴を脱いで読書できる"絵本ふれあい"スペースや、クリスマスの飾りを配して世界の絵本を展示する粋なコーナーもある

左から竹田元館長、平田オリザ氏、井上ひさし氏、佐藤修三演劇学校教頭



後に井上氏から返事がきて「小松を嫌っているなんてとんでもないデマ、60才になったら小松に住もうと思っている。講演会は来年8月新山神社の祭りの日にやりましょう。謝礼は不要です」という返事が来たのである。

町民を感動に包んだ講演会の1週間後には「小松に劇場をつくりたい」と井上氏から連絡が入り、遠藤さんと仲間たちは社会教育課にいた竹田元館長らの協力を得て劇場開設への地盤づくりをスタート、東京へも井上作品を観劇に出かけるようになった。

昭和58年1月、井上氏から「こまつ座」を結成し翌年4月に生まれ故郷で最初の公演をすると挨拶文が送られて来て、皆びっくり。約束どおり59年1月にこまつ座は川西町で旗揚げ公演し、同時にこまつ座応援会として「山形こまつ座」が結成された。現在山形こまつ座には3600人の会員がいて、プラザで行う公演事業や蔵書の整理などを多面的に協力している。

一方、千葉にある井上家を何度も訪ねていた遠藤さんは、本が家からはみ出すほどあるのに驚き、不要のものを一部川西町に移してもらう「小さな図書館」づくりを提案する。すると井上氏から「移してよい、私も月一度会いに行きます」と返事があり、図書館づくりが具体化した。当時町立図書館の本は3万冊、井上氏は家にある本は4万冊位かなと言ったが、実際には7万冊を有に越えていた。「12連の書庫があり、5つの部屋が本で埋まり、屋上の物置や作家の寝室にも踏み場がない程本であふれていた。8人が3泊4日の予定で運び出しに行ったが、それで終らずさらに2日間、11tトラックで5台あった」と遠藤さんは当時の恐怖にも似た感動を著書『遅筆堂文庫物語』で詳しく語っている。町に運んだ本の分類や収納が大変だったことは言うまでもない。

●青少年演劇教室の発表会「置賜こども芸術祭04」

フレンドリープラザの劇場は客席717席(うち母子席5)の本格的設備を持つ中ホール。ホール壁面と舞台床などはヒノキで、客席は落ち着いたグリーン色のニット張り。舞台と客席との一体感があり、ここで芝居をした役者から観客の息遣いが身近に感じられると好評のようだ。舞台は大道具置場等を含めてほぼホールと同じ面積があり、裏手には楽屋も5室ある。さらに、客席の裏手からはエントランスロビーに向けて階段があり、この階段は客席に早変わりしてミニコンサートやライブ、落語独演会等の会場になる。

「いつでも誰でも気軽に利用でき身近に感じられる劇場であることがプラザの狙いです。公演がない日でも 図書館へ来る人で賑わっており、音楽会も芝居もその延長にある親しみやすい存在ということでしょうか」と藤田宥宣館長補佐は言う。

劇場では、明日日曜日に開催される「置賜地区こども芸術祭」舞台芸術部門の発表で、ラストを飾る置賜農業高校演劇部が最後の稽古をしていた。同校の演劇部は年間10回近く公演する活発な演劇集団で、その指導に当たっているのが河原俊雄先生(58)。ライト、小道具の配列、音量、役者の位置と動き方等、河原先生の指示がくり返し厳しく飛び、生徒たちは実によく応える。「個々に歌や踊りは練習してきていますが、プラザで機器を使っての舞台稽古はしていませんので、今日は真剣です」と河原先生。河原先生は町に開設した「演劇学校」の第一期生で、置賜農業高校演劇部は先生の提案と指導で開部した。女子15名、男子6名の21名の部員がおり、毎日ハードな練習をしてきた。

「演劇学校」はプラザが力をいれている企画事業で、平成9年3月に開校した。校長は井上ひさし、運営はこまつ座。

演劇教室で学び、置賜こども芸術祭に「アエイウエことば遊び」で出演する川西町の子供達と指導の佐藤満徳先生

現場で指導に当たる教頭には秋田市で25年間演劇活動を行って来た佐藤修三氏が就任した。30名の定員に対して100名の申し込みがあったため、地域別や年齢別など小班に分けて週一回ずつ開校してきたが、何年かたつと遠距離組は次第に減り、現在は町内の小中学生や主婦、高齢者が増えている。

「プラザの舞台を使って歩き方、発声の仕方から照明や音響も学びます。演劇学校を卒業して劇団を結成し年1回公演しているグループもいくつかあります」と遠藤さんは言う。

今回「こども芸術祭」に出る川西町の小学生も演劇教室で学んでおり、4～6年生9名が月一回稽古してきた。

さて、いよいよ「こども芸術祭」当日となった。トップを切って川西町の児童5人が「アエイウエことば遊び」というタイトルで、言葉をきちんと伝え表現する楽しさをパフォーマンスした。無口で友だち付き合いが苦手だった少年が演劇活動を通して大きな声できちんと話す明るい活発な子になったと、指導に当たる佐藤満徳先生は言う。続いて米沢市の小中学生14名による謡曲と狂言。「狂言の杜」という文化活動で子供達に伝統芸能を教えており狂言「盆山」を舞う男子の演技は見事だった。三番目は飯豊町「めざみキッズ」の小1から中1の子どもに大人も参加、25名が賑やかに歌って踊るミュージカル「小鳥が生まれた日」「雪合戦」。親子で楽しみながら練習し各地へ公演に出かけるという実力グループの一つ。

他に白鷹町の少女たちによる巫女舞い、南陽市中川小学校児童3名による昔はなし語り（方言による語りを学校あげて取り組んでいる）、米沢市児童会館演劇教室の演劇「双子の星」があり、最後に置賜農業高校演劇部のミュージカルとなった。子供向けのミュージカルで「ニンジンなんて、どぅあ～いっキライ!!」という題名にふさわしく、野菜たちが沢山登場して、歌と踊りを披露する。最後には出演した子供達全員が舞台へ上がって一緒に歌い踊ってフィナーレとなった。会場を埋めた父兄たちも手拍子で声援し、3時間にわたる演劇祭は終った。

東北地方は民話や郷土芸能の宝庫、これらの子供達がさまざまな形でそれを伝承し表現していくことだろう。

なおこまつ座は、昨年9月に第74回公演として「花よりタンゴ」（演出／栗山民也）をフレンドリープラザで公演、今年3月には新作「円生と志ん生」（演出／鵜山仁、出演／角野卓造・辻萬長）を川西町を皮切りに公演することが予定されている。人気の「國語元年」も3年ぶりに再演されるようだ。

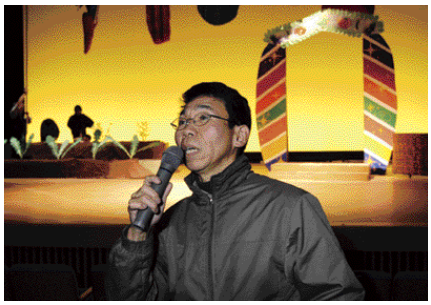
文／浅井登美子　写真／小林恵

▲米沢市狂言の杜・狂言ワークショップ

▲飯豊町「めざみキッズ」のミュージカル

▲南陽市中川小学校児童の「語り」

▲白鷹町「八乙女の舞い」


▲「ニンジンなんて、どぅあ～いっ きらい」と演劇指導をする置賜農業高校演劇部・河原俊雄先生(右)

▶ラストは全員が舞台に登って一緒に歌い踊る

東北から演劇文化を発信する

伊達文化を今に伝える「登米能」（宮城県登米町）

北上川舟運の中継地として栄えた登米町は伊達藩の影響も多く、江戸時代の町並みに武家屋敷や土蔵づくりの商家、明治時代の洋風校舎等が残り、これらを保存して町全体が建物博物館といった雰囲気になっている。

平成8年に建築されたのが伝統芸能伝承館「森舞台」で、年二回（6・9月）夕闇の迫るころから篝火の中で「登米薪能」が演能される。

伊達文化を今に伝える登米能は県無形民俗文化財に指定され、登米謡曲会の人々によって継承されてきた。昨年秋は竹林と紅葉の中の舞台で、能「小袖曽我」「鞍馬天狗」を演能した。全席予約制で有料（1500円～2500円）だが、年二回だけなので楽しみにしている人が多く満席となる。

登米謡曲会は、文部大臣賞（文化財保護）・国土庁長官賞（過疎地域自立活性化）を受賞している。問い合わせ先は（株）とよま振興公社☎0220-52-5566

漁師が継承してきた上方歌舞伎「福浦の歌舞伎」（青森県佐井村）

下北半島には古くは恐山をはじめ各地に山伏修験道場があり、修験者たちによって山伏神楽（能野舞）が各地にもたらされた。都から流れて来た落人によって伝承された能楽などもある。下北半島西側に位置する佐井村には海の交易が盛んな時代にもたらされた芸能として「福浦の歌舞伎」が継承されている。110年前に上方歌舞伎役者の中村菊五郎夫妻が訪れ、地元の漁師に口伝えで教えたもので、福浦集落（純漁村で64戸）では全員が参加して継承、秋の佐井村芸能発表会などで上演してきた。県の無形民俗文化財に指定され、村では「歌舞伎の館」を建設し、保存継承を支援している。

福浦の歌舞伎は、カラフルな衣装とコミカルな動きが特徴で、大鼓、小鼓などを持って踊り謡うという、歌舞音曲の色彩が混じった歌舞伎で、小さい子供も喜んで観るという。佐井村教育委員会☎0175-38-4506

雪の上で酒食しながら地芝居「黒森歌舞伎」（山形県）

大鹿歌舞伎（長野県）と並んで国選定の無形民俗文化財に指定されている黒森歌舞伎は酒田市黒森地区で継承されてきた冬の風物詩。昔は地芝居専用の舞台があったが、いまは保育園と兼用のコンクリート製の舞台で、客席は野外。2月中旬の公演では、雪の上に筵をひいて酒や弁当を食べながら観劇する。演目は三番叟について「絵本太功記」「義経千本桜」等のお馴染みの作品。酒田市商工課☎0234-51-111

演劇を全国ネットで発信 田沢湖芸術村「わらび座」

地方演劇活動の拠点として劇場、研修棟、レストラン等の付帯設備を持ち、年間を通して演劇活動を行っているのが「わらび座」。民話の宝庫と言われる田沢湖町をホームベースに昭和28年に創設し、現在5つの公演グループが年間1000回以上の全国公演を行っている。「わらび座」への修学旅行も20年の歴史を持ち、ソーラン節や農業体験を入れたカリキュラムで毎年60校1万人を受入れている。演劇を学ぼうという自治体関係者、役者や演出希望の若者たちの研修の場になっており、農場で働きながら演劇をめざす人も。昨年は「銀河鉄道に乗って」「よろけ養安」「ドクトル長安」等を公演。☎0187-44-3316

平成16年度ビデオ完成！

「自分たちの住んでいるところは自分たちの手で」

全国で市町村合併が進行する中で、各地で住民が主人公となって様々な試みが行われています。地域のアイデンティティーを失うことなく、いきいきした地域づくりを進めていくためにはどうすればよいか。このDVDでは、旧村単位に地域振興会を立ち上げている京都府美山町と、地域の資源を掘り起こして地域づくりに生かしている新潟県山北町を紹介します。

京都府美山町／旧村単位ごとに「地域振興会」を起こし各々の地域のよさを大事にした地域づくりをおこなっている。中でも平屋振興会の住民出資の店が住民を元気にしている。

新潟県山北町／集落ごとに生活の中に資源を発掘して「魅力ある集落づくり」をめざしている。「小俣ふるさと楽校」活動、しな布織りを活かした「さんぼく生業の里」等を紹介。

制作：桜映画社
企画・監修：財団法人過疎地域問題調査会
協力：総務省自治行政局過疎対策室

編集後記

▼本誌「DePOLA」28号は、昨年9月から11月末にかけて取材したのであるが、昨年は異例な猛暑続きの夏がやっと終ると、連続的に台風の上陸に見舞われた秋だった。そのため予約しておいた新幹線をキャンセル、取材先への日程を変更することもあった。また、地域芸能の上演日や演劇の発表会は土日曜日がほとんどであったため、取材に行けない市町村もあった。この場をかりてお詫び申し上げたい。

▼現在地方都市の文化活動が活発である。今回取材した過疎指定町村にも優れた演劇ホールや付帯施設が整っていて、子供からお年寄りまで実にいきいきと元気に活用していた。中央の演劇も音楽もナマでふれる機会が多くなり、自分達が役者として舞台に立つチャンスもある。仲代達矢さんが「地方の人の方が目が肥えている」と語っていたが、本当にその通りだと実感した。

▼地歌舞伎、能等の伝統芸居は、祭りの折に上演されるものが全国的にあるが、今回の特集では「芝居小屋」を有していて、保存会があり、長年にわたり定期的に公演して来たものに限って取材させてもらった。演じる人と観る人が一つになって心を通わすひととき、遠い昔の風や先人たちの息づかいも感じられるひととき、まさにドラマティック・ステージである。旅行の中に観劇をぜひ加えるようお勧めしたい。(A)

De POLA No.28
［でぽら］2005年春夏号

発行日／平成17年3月5日
発行所／財団法人過疎地域問題調査会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
第一天徳ビル3階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602
http//www.kaso-net.or.jp/
編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい
編集工房アド・エー

DePOLA [でぽら] NO.28
平成17年3月5日発行
発行／財団法人過疎地域問題調査会 〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号 第一天徳ビル3階 ☎03(3580)3070代

当てる楽しみと、育てる喜び。

収益金を通じて身近な暮らしを快適にすることも、宝くじの大きな役割です。広場や街路をはじめ、子供たちの笑顔が光るところで、健やかな明日を育んでいます。

宝くじの収益金は、身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人日本宝くじ協会

当たりはしっかり届くて、しっかり貢献。

http://www.takarakuji-coon-net.or.jp

最新販売中の宝くじを、日本全国どこでも購入することは、法律で禁止されています。